

神戸市北区

# 八多中遺跡 清水廻り遺跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書文集—

平成10年3月

兵庫県教育委員会



神戸市北区

は た なか  
八 多 中 遺 跡  
し みず まわ  
清 水 回り 遺 跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 XXVI —

平成10年 3月

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本書は、神戸市北区八多町中所在の八多中遺跡、八多町下小名田字清水廻り所在の清水廻り遺跡の発掘調査報告書である。
  2. 発掘調査は、山陽自動車道（神戸～三木）建設に関連するもので、日本道路公団の委託を受けて、平成5～6年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
  3. 出土品整理作業は、平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
  4. 本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影し、遺物写真撮影は、柳衣川に委託して実施した。
  5. 本書に使用した図のうち、遺構についての実測は調査員、調査補助員が行い、遺物については整理技術嘱託員が行った。
  6. 本書の執筆は、本文目次および各文末に記したとおり分担し、八多中遺跡は長濱誠司が、清水廻り遺跡は仁尾一人が主担当となり、最終的に小山みゆきの補助をえて長濱が編集を行った。また、出土須恵器の胎土分析を奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼し、玉稿を頂いた。
  7. 出土遺物のうち、金属器、木器については加古千恵子、藤田淳の指導により、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保存処理を実施した。
  8. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）および魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）で保管している。
  9. 現地調査および整理作業の際には、関係各機関をはじめ、以下の方から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表す。
- 小栗柄健治　　村上泰樹　　長谷川眞　　池田毅

## 凡 例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とし、方位は座標北を指す。
2. 遺物は土器、金属器、石器とも八多中遺跡、清水廻り遺跡の順に通し番号を付けている。石器・金属器・木器には、その頭にそれぞれS・M・Wをつけて土器と区別している。また、遺物の番号は本文・挿図・図版とともに統一している。
3. 遺構名はアルファベットによる略号と2桁の数字で表記する。各遺構は遺跡ごとに01から始める。略号の意味は下記のとおりである。

SB：掘立柱建物跡　　SD：溝　　SII：堅穴住居跡　　SK：土坑　　P：柱穴
4. 本書における地区名は現地での呼称を使用した。遺構名は報告の段階で新たに統一した番号に呼び変えている。

# 目 次

## 本文 目 次

### 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 1. 調査に至る経緯（長濱誠司）	1
第2節 調査の経過 1. 確認調査の概要（長濱）	1
2. 全面調査の概要（長濱）	3
第3節 整理作業の経過（長濱）	5

### 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境（岡本・秀・長濱）	6
第2節 歴史的環境（仁尾一人・長濱）	7

### 第3章 八多中遺跡の調査

第1節 遺跡の概要（長濱）	9
第2節 基本層序（長濱）	12
第3節 遺構 1. 積穴住居跡（岡本）	12
2. 掘立柱建物跡（岡本・長濱・仁尾）	13
3. 清（長濱・仁尾）	18
4. 土坑（長濱・仁尾）	23
第4節 遺物（岡本・長濱）	25
第5節 小結（長濱）	29

### 第4章 清水廻り遺跡の調査

第1節 遺跡の概要（久保弘幸・長濱）	31
第2節 基本層序（久保）	31
第3節 遺構 1. 近世の遺構（久保）	31
2. 中世の遺構（久保）	33
第4節 遺物 1. 土器（仁尾）	38
2. 金属器（長濱）	40
3. 石器・石製品（久保）	41
第5節 小結（久保）	45

### 一付編一

小名出窯跡・八多中遺跡・清水廻り遺跡出土須恵器の蛍光X線分析（三辻利一）	46
報告書抄録	50

# 表 目 次

表1 八多中遺跡全面調査一覧表	4
表2 清水廻り遺跡全面調査	4
表3 八多中遺跡出土石器・石製品法量表	44
表4 清水廻り遺跡出土石器・石製品法量表	44

—付編—

表1 分析データ ..... 47

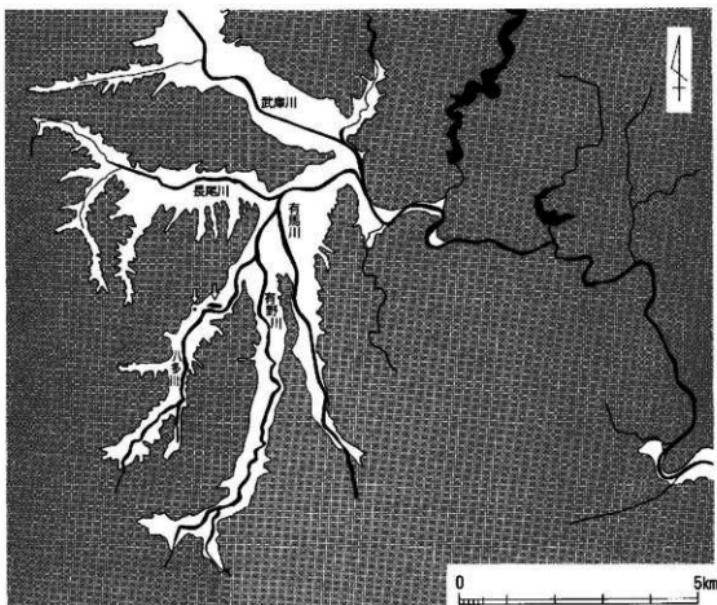
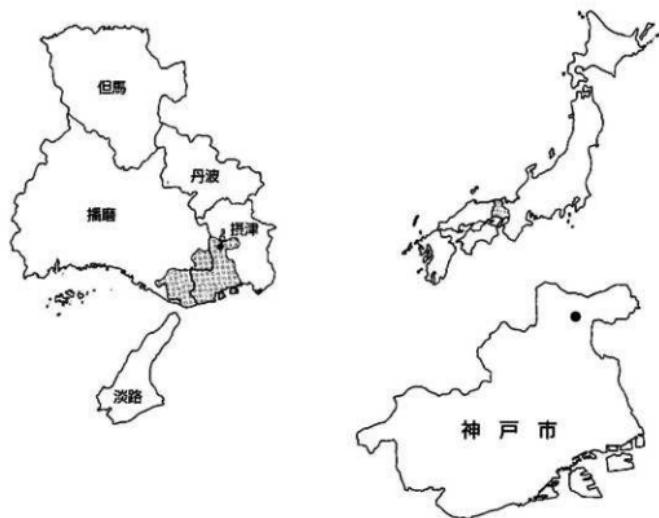
挿図図版目次

第1図 調査区・試掘坑設定図	2
第2図 調査区周辺地形図	6
第3図 周辺の遺跡（国土地理院発行 1/25000地形図「三田」「武田尾」「有馬」「宝塚」を使用）	8
一八多中遺跡—	
第4図 調査区地区割図	9
第5図 県道北側平面図・断面図	10
第6図 県道南側平面図・断面図	11
第7図 SH01	12
第8図 SB01	13
第9図 SB02	14
第10図 SB03	15
第11図 SB04	16
第12図 SB05・06	17
第13図 SD01・04・05	19
第14図 SD07・08・09・10	22
第15図 SD02、SK01断面図	23
第16図 SK02	24
第17図 掘立柱建物、土坑出土土器・木器	25
第18図 溝出土上器	27
第19図 遺物包含層出土上器	28
—清水通り遺跡—	
第20図 調査区平面図	32
第21図 近世遺構群配置図	33
第22図 SK02・03	34
第23図 SB01	35
第24図 SK04	36
第25図 SK05、SD01	37
第26図 清水通り遺跡出土上器	39
第27図 清水通り遺跡出土土器・金属器	40
第28図 八多中遺跡・清水通り遺跡出土石器	41
第29図 八多中遺跡・清水通り遺跡出土石製品	42
—付編—	
第1図 小名田窯跡出土須恵器の両分布図	48
第2図 清水通り遺跡・八多中遺跡出土須恵器の両分布図	49

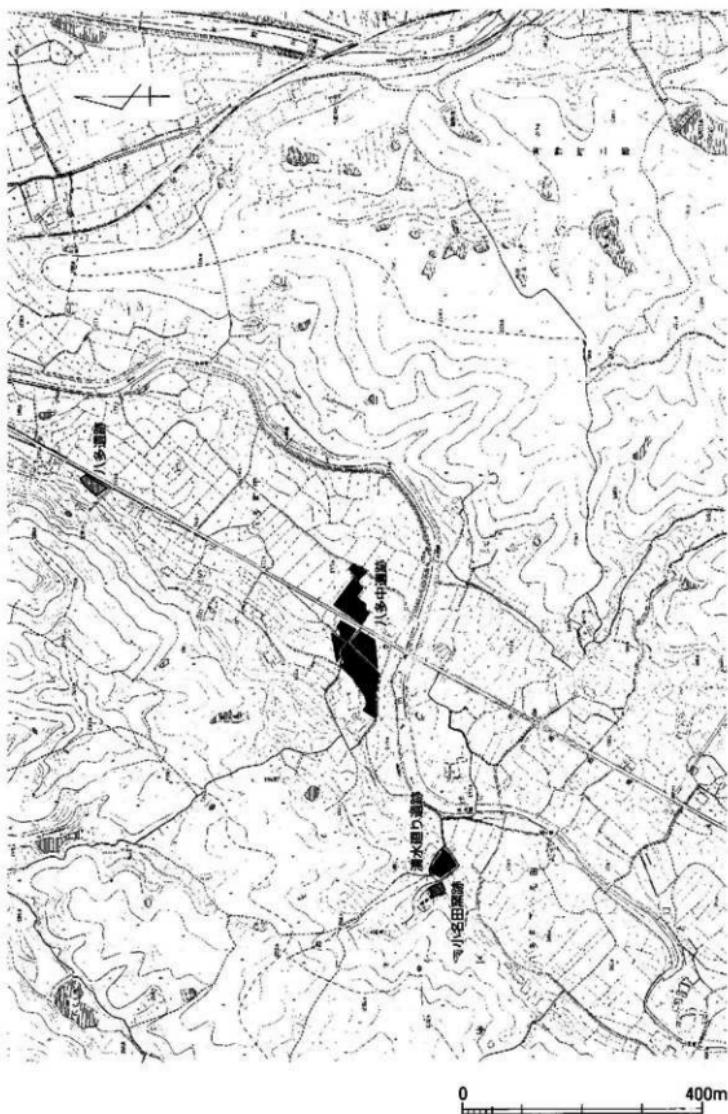
## 写真図版目次

### 写真図版1 遺跡の遠景

- 写真図版2 八多中遺跡1 八多中遺跡全景 丘陵上からの遠景 県道南側確認トレンチ  
写真図版3 八多中遺跡2 A地区航空写真 B・C・D地区航空写真  
写真図版4 八多中遺跡3 H地区航空写真 I地区航空写真 II地区全景 I地区全景  
写真図版5 八多中遺跡4 SH01 SB01・02検出状況 SB01・02  
写真図版6 八多中遺跡5 SK01 SK02土器出土状況 SK02断面 SK02完掘状況  
SD01A地区検出部分 SD01B地区検出部分  
写真図版7 八多中遺跡6 SD01II地区検出部分 SD01AA'断面 SD01CC'断面  
SD01上器出土状況  
写真図版8 八多中遺跡7 SD02 SD01とSD02 SD02断面 SD02土器出土状況  
SD02流木出土状況 SD6 C地区検出部分 SD6 D地区検出部分  
写真図版9 八多中遺跡8 E地区航空写真 J地区①航空写真 J地区②航空写真  
写真図版10 八多中遺跡9 G地区SB03・04 SB03G地区検出部分 SB03J地区検出部分  
SB04 SB04柱根・礎板  
写真図版11 八多中遺跡10 E地区全景 SD11断面・土器出土状況 F地区全景 J地区②全景  
写真図版12 八多中遺跡11 SD07J地区検出部分 SD07F地区K検出部分 SD07AA'断面  
SD07I器出土状況 J地区SD09断面 F地区SD08断面  
F地区KSD10断面 J地区①全景
- 写真図版13 清水廻り遺跡1 清水廻り遺跡全景 SK04集石 SK04土器出土状況 SK05断面  
SK06断面 SD01断面  
写真図版14 清水廻り遺跡2 近世遺構全景 SK01 SK02土器出土状況 SK03断ち割り断面
- 写真図版15 八多中遺跡 SB03・04、SK02出土土器 SD01出土土器  
写真図版16 八多中遺跡 SD01出土土器  
写真図版17 八多中遺跡 SD01・02・07出土土器  
写真図版18 八多中遺跡 SD02・05出土土器・遺物包含層出土土器  
写真図版19 八多中遺跡 遺物包含層出土土器  
写真図版20 清水廻り遺跡 出土土器  
写真図版21 清水廻り遺跡 出土土器  
写真図版22 清水廻り遺跡 墓石土器 頸椎器輪重ね焼き 出土金属器 出土銅錢  
八多中遺跡 SB04柱根 出土銅錢
- 写真図版23 清水廻り遺跡 出土石器 石製品



八多中遺跡・清水廻り遺跡の位置



調査区位置図

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

### 1. 調査に至る経緯

山陽自動車道は大阪府吹田市を起点にして、瀬戸内海沿岸の主要都市を結び、山口市にいたる総延長434kmの高速道路である。日本道路公团大阪建設局では山陽自動車道の神戸～三木間について、平成2年度より工事に着手することとなった。

この計画を受け、兵庫県教育委員会では昭和61年4月と昭和62年3月の2回にわたって路線内の遺跡分布調査を実施した。その結果神戸市北区八多町下小名田字清水廻り、字平井と八多町中字林ヶ谷、字新谷、字才ノ元、字吉安、字池尻、字下ヨサ田、字戸崎、字合ノ元、字東川原にまたがる2地点で遺物の散布が認められた。分布調査を実施した時点では当該地には周知の遺跡は存在しなかった。そこで便宜上前者をNo106地点、後者をNo110地点と仮称した。

## 第2節 調査の経過

### 1. 確認調査の概要

確認調査は平成2年1月から3月の間に山陽自動車道神戸～三木間の確認調査の一環として実施された。この時点でNo106地点は小字名をとって清水廻り遺跡と命名した。また、No110地点は小字名が9か所にまたがっているため、大字名をとって八多中遺跡と命名した。

調査方法は一連の山陽自動車道の確認調査と同様の方法で行い、水田部分は2×2mのグリッドを、路線に沿って20m間隔で、路線に直交する方向には10~15m間隔で設定した。

八多中遺跡はその後も数次の確認調査が工事の進捗に伴って実施されている。これらの調査は幅1mのトレンチによるもので、トレンチは地形等を考慮して長さを変えている。掘削はグリッド調査は表土から遺構面まですべて人力で行い、トレンチ調査については表土以下遺物包含層までを重機によって掘削し、以下遺構面までを人力で掘削した。掘削後土層観察のための断面整形および遺構面精査を行い、写真、実測によって記録に残した。

山陽自動車道建設に伴う八多中遺跡・清水廻り遺跡の確認調査の概要是下記の通りである。

#### 八多中遺跡の確認調査

(遺跡調査番号 890111)

調査期間 平成2年2月26日～3月9日

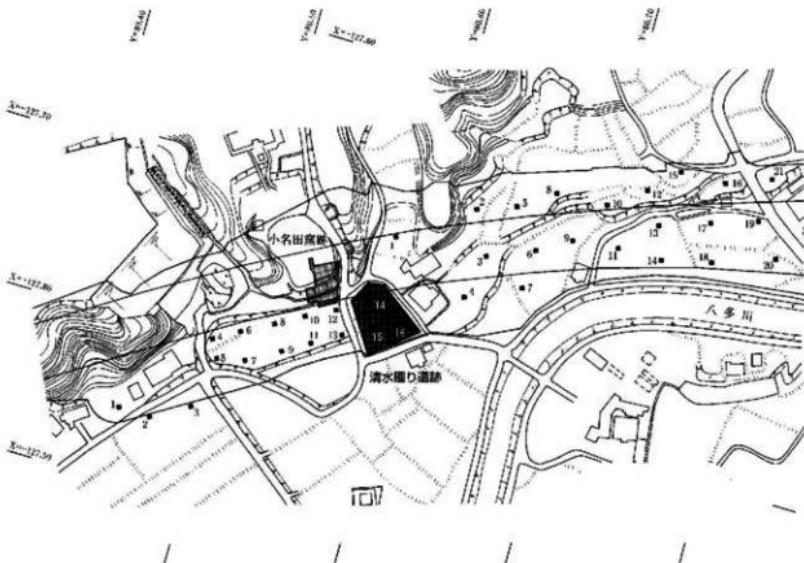
調査面積 264m<sup>2</sup>

調査担当者 岡田章一・山下史朗・高瀬一嘉・中村弘・多賀茂治

調査地点は水田・畑地・荒地を対象とし、宅地は調査からは除外した。

路線に沿っては3列に計66箇所のグリッドを設定して実施した。

調査の結果、No23・26・28・29・30・36・48・49の各グリッドで中世の土坑・溝・ピット等が検出され、それに伴って土師器・須恵器・磁器等の遺物が出土している。遺構・遺物の検出されたグリッドは扇状地上に設定したものに限られ、遺跡の範囲もここに限られると判断した。



第1図 調査区・試掘坑設定図

(調査番号 930089)

調査期間 平成5年10月12日～10月18日

調査面積 135m<sup>2</sup>

調査担当者 久保弘幸・仁尾一人

平成元年度の確認調査の結果、二次確認調査が必要とされた県道南側で、調査可能な範囲についてのみ実施した。調査は第1次全面調査と平行して行われた。

調査は地形を考慮して幅1m、延長10～15mのトレンチを合計10本設定して実施した。その結果、トレンチ6で遺構が検出されたため、一部を拡張して調査を行った。最終的にトレンチ6を設定した水田部分についてE地区として同年度に全面調査に移行した。

(遺跡調査番号 930244)

調査年月日 平成6年3月22日（1日間）

調査面積 27m<sup>2</sup>

調査担当者 久保弘幸

第1次調査を実施した範囲に隣接した耕作地にトレンチを2本設定し、調査を実施した。

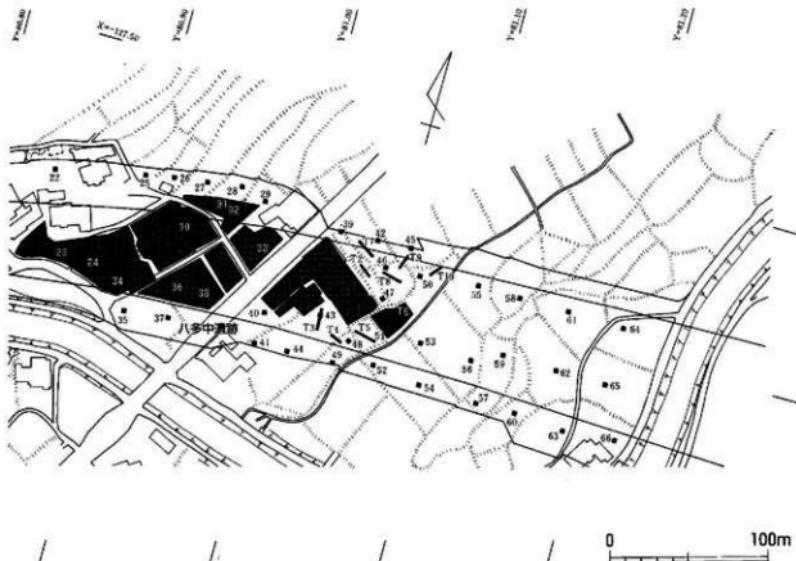
調査の結果、いずれのトレンチでも遺構が検出され、平成6年度に全面調査に移行した。

(遺跡調査番号 950361)

調査年月日 平成7年11月13日（1日間）

調査面積 20m<sup>2</sup>

調査担当者 森内秀造・仁尾一人



山陽自動車道建設に伴う中国縦貫自動車道拡幅部分の確認調査である。昭和46年に調査された八多遺跡の隣接地にあたる。グリッドを5つ設定し調査を実施したが、遺構は確認できなかった。

#### 清水廻り遺跡の確認調査

(遺跡調査番号 890110)

調査期間 平成2年3月13日

調査面積 61m<sup>2</sup>

調査担当者 岡田章一・山下史朗・高瀬一嘉・中村弘・多賀茂治

路線に沿って2列に計16箇所のグリッドを設定して調査を実施した。調査の結果、調査区西側に設定したNo 6・14・16グリッドから中世のピット・土坑等の遺構と、それに伴う須恵器・土師器等の遺物が検出された。また、他のグリッドは遺物がある程度出土するものの、明確な遺構は検出されなかった。しかし調査範囲の北側には小名田窯跡が所在し、後にその調査結果と合わせて全面調査範囲を確定した。

## 2. 全面調査の概要

全面調査は平成5年度の5月に清水廻り遺跡の調査から開始した。7月から引き続いて八多中遺跡の調査を開始した。平成5年の夏は異常気象で、梅雨期の後も雨が続いた、調査の進捗に影響を及ぼした。なお、平成5年度の八多中遺跡の調査終了後、清水廻り遺跡に隣接する小名田窯跡の調査を行っている。

平成6年度は山陽自動車道（神戸～三木）の調査最終年度であるが、八多中遺跡内には未買収地が残り、用地買収が終了するたびに工事の進捗と他の発掘調査とを調整し、八多中遺跡の調査に対応することとなった。平成6年度は前年と一変して少雨で酷暑の夏であり、急ピッチで進む工事現場の中での調査となつた。最終次の調査が開始された1月に阪神・淡路大震災が発生し、八多中遺跡の所在する神戸

市北区でも少なからず被害を受けた。

調査は八多中遺跡、清水通り遺跡とも重機を用いて表土から遺物包含層直上まで掘削し、以下遺構面まで人力で掘削した。遺構面精査の後足場上から全景および個別遺構の写真撮影を行った。なお、第2・3次調査と清水通り遺跡の調査を除いてヘリコプターによる航空写真撮影を行っている。遺構面の平面実測は四角座標を用いた座標系を調査区内に設定し、行っている。

調査を担当した職員、調査に参加した調査補助員・室内作業員は以下の通りである。

表1 八多中遺跡全面調査一覧表

調査番号	調査期間	調査地区	調査面積	調査担当者	調査補助員	室内作業員
930089	19930730 ↓ 19940107	A・B・C D・E地区	3288m <sup>2</sup>	久保 弘幸 仁尾 一人	—	山門 美保 橋本 妙子
940102	19940418 ↓ 19940425	F 地区	320m <sup>2</sup>	長濱 誠司 仁尾 一人 井木 有二	—	—
940223	19940701 ↓ 19940712	G 地区	256m <sup>2</sup>	井守 徳男 種定 淳介 長濱 誠司	進藤眞己子 将積伸一郎	太田八重子
940105	19940801 ↓ 19941001	I・J地区	1321m <sup>2</sup>	久保 弘幸 岡本 一秀	—	—
940311	19950111 ↓ 19950331	H・J地区	2315m <sup>2</sup>	井守 徳男 種定 淳介 長濱 誠司	中北 敏子 大石 雅一 進藤眞己子	—

表2 清水通り遺跡 全面調査

調査番号	調査期間	調査地区	調査面積	調査担当者	調査補助員	室内作業員
930031	19930506 ↓ 19930719	—	1076m <sup>2</sup>	久保 弘幸 仁尾 一人	—	山門 美保 橋本 妙子

### 第3節 整理作業の経過

遺物の整理は、発掘調査時に監督員詰所にて土器の水洗作業から開始し、一部についてはネーミング・接合作業まですめたものもある。しかし室内作業員確保の問題等から各調査時の作業進捗は一定でない。

本格的な整理作業は、八多中遺跡・清水廻り遺跡を合わせて、平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて日本道路公団との整理契約に基づいて実施した。

整理作業は平成9年度のうちに残されたネーミング・接合作業から開始し、報告書刊行まで進めた。

八多中遺跡・清水廻り遺跡からは少量ながら金属器、木器が出土している。これらの保存処理は、該器は加古千恵子、木器は藤田淳の指導により、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。

#### 整理の体制

整理担当職員	整理普及班	主　　査	加古千恵子（保存処理担当）
		主　　査	藤田　淳（保存処理担当）
	復興調査第1班	主　　査	久保　弘幸
	整理普及班	技術職員	長濱　誠司
	調査第2班	技術職員	仁尾　一人
	調査第3班	技術職員	岡本　一秀

整理技術嘱託員 小山みゆき・矢島馨・木村淑子・飯田章子・佐伯純子・藏幾子・島村順子・竹内泰子  
・茅原加寿代・臼井昌代・中村正子・宮野正子

（保存処理担当） 栗山美奈・和田寿佐子・船木昌美・川上祿・田中葉・位上篤子・前川悦子

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

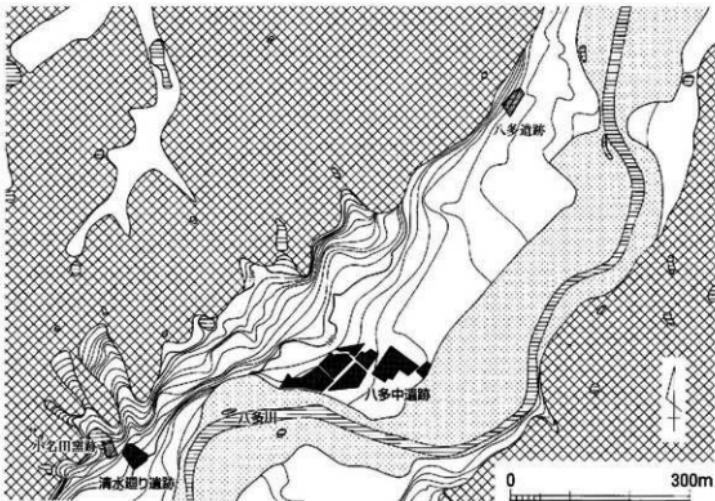
八多中遺跡・清水廻り遺跡は、三田盆地の南端、武庫川水系八多川下流域に位置する。

八多川は、神戸層群と呼ばれる堆積層を浸食して段丘を形成しながら道場町日下部付近で有野川に合流し、有野川は長尾川に、長尾川は篠射山の東側で武庫川と合流する。

八多中遺跡・清水廻り遺跡の周辺の地形は、標高190mを扇顶部とする扇状地が南東方面に展開しているが、県道三木三田線がはしる標高175m付近を境として見かけは平坦な段丘面となる。水田の形態も地形に即して東西方向に細長い棚田から南北方向に長い短冊状へと変化している。八多中遺跡の標高は175m、清水廻り遺跡の標高は181m前後である。

八多中・清水廻り両遺跡が位置する三田盆地は、揖津国に属している。しかし、中央を流れる武庫川は盆地を過ぎると狭隘な武田尾の渓谷となり南側は急峻な六甲山地に阻まれ、揖津平野とは隔絶した空間を形成している。この地域が近年まで大規模開発と無縁であったのは以上のような理由による。一方で八多川を逆上すると狭い谷ながら容易に加古川水系へ達することができる。そのためこのルートは、古代より播磨から有馬を経て揖津へ至る主要街道となっている。現在も県道三木三田線として主要道路に変わりはない、多数の車両が通行している。

1970年代以降三田盆地は交通網の整備、大規模な新都市開発により阪神間のベッドタウン化が進み、全国有数の人口増加地域となっている。薙糞民家が多数残り、古き良き農村の景観を見せてきたこの地域も大きく変貌してきている。



第2図 調査区周辺地形図

## 第2節 歴史的環境

三田盆地南部において旧石器・縄文時代の明確な遺跡はほとんどなく、いくつかの遺跡から少量の遺物の出土が報告されているのみである。

遺跡数が増加するのは弥生時代に入ってからである。長尾川・有馬川・有野川合流点東側の平野に位置する塩田遺跡は中期を主体とした武庫川中流域の拠点的集落の1つであるが、付近から産出する通称塩田石を用いた石庵丁の製品・未製品がまとまって出土しており、石庵丁供給地の可能性がある。また、付近の鏡射山からは石劍が出土している。その他、弥生時代の遺跡は後期の住居跡や土坑等が検出された宅原遺跡、丘陵上に立地する中期から後期にかけての集落跡である北神No.4地点遺跡がある。

古墳時代を象徴する古墳の築造は弥生時代末から古墳時代初頭と推定される定塚古墳群を最初とする。次いで北神No.9地点遺跡1号墳が4世紀末から5世紀初頭に築造される。ただし三田盆地においては中期段階でも首長墓と呼ぶべき古墳は確認できず、中央政権との結びつきは弱かったと考えられる。

古墳の数が増大するのは古墳時代後期に入つてからである。三田盆地南端では河川合流点付近に横穴式石室を中心古墳が集中する。有野川右岸の日下部地域において、5・6世紀に木棺直葬や横穴式石室を主体とする群集墳が形成され、また馬具を副葬し6世紀後半に築造された横穴式石室墳であるオキダ古墳群の築造が行われている。この地域の横穴式石室を特徴づけるものに石棚があり、調査地周辺では尼崎学園内4号墳にみられる。集落跡では、二郎宮ノ前遺跡で後期末の住居跡15棟の他土坑、溝が検出されている。長尾川流域に位置する宅原遺跡では古墳時代のはば全期を通して集落が存続している。

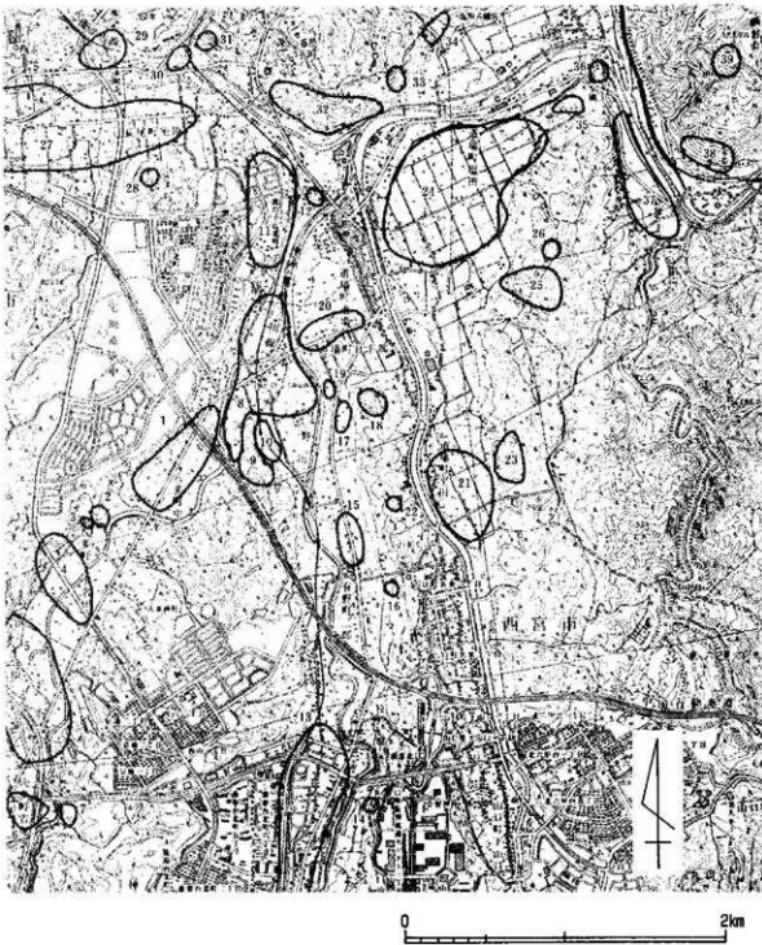
奈良時代以降、遺跡の数はさらに増加する。主な集落遺跡としては宅原遺跡、日下部遺跡、二郎宮ノ前遺跡等がある。宅原遺跡では「評」の墨書きのある土器が出土し、古代有馬郡衙の可能性をもつ。

八多川流域で、明確に生活の痕跡が見られるのは平安時代に入ってからである。上小名田遺跡は平安時代中期から後期に継続して集落が営まれ、比較的大きな掘立柱建物が検出されている。下小名田遺跡では平安時代に長期にわたって掘立柱建物が存続し、特筆すべき遺物として石帯、銅印が出土している。日下部遺跡では平安時代後期の建物群が検出されている。

古代の集落は中世まで存続しているものが多い。また遺跡数、遺跡内での遺構の密度は急増し、多くの遺跡でこの時期の掘立柱建物が検出されている。宅原遺跡では平安時代後期から鎌倉時代、室町時代へと長期間集落が存続する。二郎宮ノ前遺跡でも集落が鎌倉から南北朝時代にわたって存続しており、集落内には庭園をもつ居館が検出されている。塩田遺跡では塩田荘の荘官層の居館と推定される掘立柱建物や墓等が検出されている。生産遺跡としては清水廻り遺跡に隣接して小名田窯跡が所在している。

### 参考文献

- ・兵庫県史編纂室『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県 1992年
- ・新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史歴史編Ⅰ』 神戸市 1989年
- ・神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財分布図』 1996年
- ・淡神文化財協会『下小名田遺跡—(その4)—』 1993年
- ・神戸女子大学考古学研究室『上小名田遺跡の研究』 上小名田遺跡調査委員会 1994年
- ・神戸市教育委員会『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 1997年
- ・兵庫県教育委員会『二郎宮ノ前遺跡現地説明会資料』 1994年
- ・妙見山麓遺跡調査会『宅原遺跡 宮之元地区的調査』 1986年



- |           |             |                 |              |
|-----------|-------------|-----------------|--------------|
| 1. 八多中道跡  | 2. 清水通り道路   | 3. 小名田道跡        | 4. 下小名田道跡    |
| 5. 上小名田道跡 | 6. 吉添道跡     | 7. 古尾城跡         | 8. 日下部道跡     |
| 9. 小坂道跡   | 10. 二郎宮ノ前道路 | 11. 北神ニュータウン道路群 | 12. 松原城跡     |
| 13. 同場道跡  | 14. 田代寺東山古墳 | 15. 下二郎道跡       | 16. 東二郎道跡    |
| 17. 二郎道跡  | 18. 二郎古墳群   | 19. オキダ道跡       | 20. 口下部北道跡   |
| 21. 平田道跡  | 22. 二郎古墳群   | 23. 桜荷神社裏古墳群    | 24. 堀川道跡     |
| 25. 舞口古墳群 | 26. 東山中道跡   | 27. 宅原道跡        | 28. 宅原城跡     |
| 29. 定塚古墳群 | 30. 天童山古墳群  | 31. 鮎形前集墳       | 32. 八景中学南古墳群 |
| 33. 川北古墳群 | 34. 八幡神社古墳群 | 35. 南所古墳群       | 36. 尼崎学園古墳群  |
| 37. 生野道跡  | 38. 中野古墳群   | 39. 篠町山城跡       |              |

第3図 周辺の遺跡

## 第3章 八多中遺跡の調査

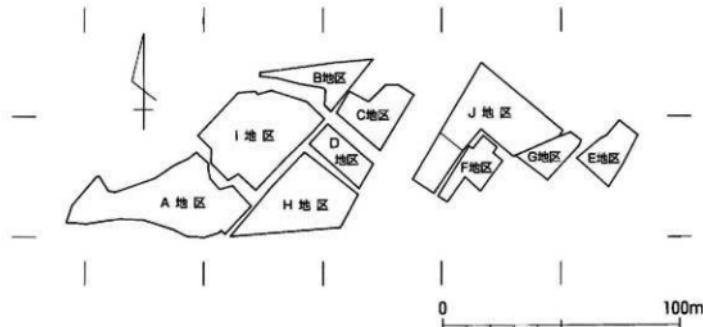
### 第1節 遺跡の概要

八多中遺跡の所在する八多町中地区付近で北流する八多川は東へ大きく蛇行する。遺跡はこの八多川と北西側の丘陵に挟まれた約400m×600mの範囲である。北東側に広がる日下部遺跡とは八多川を境としている。当該範囲は神戸市教育委員会作成の平成9年度『神戸市埋蔵文化財分布図』では「中遺跡」と記載されており、本報告で使用している「八多中遺跡」とは遺跡名が異なるが、同一の遺跡である。なお、昭和46年に調査・報告された八多遺跡は八多中遺跡の一部に含まれる。

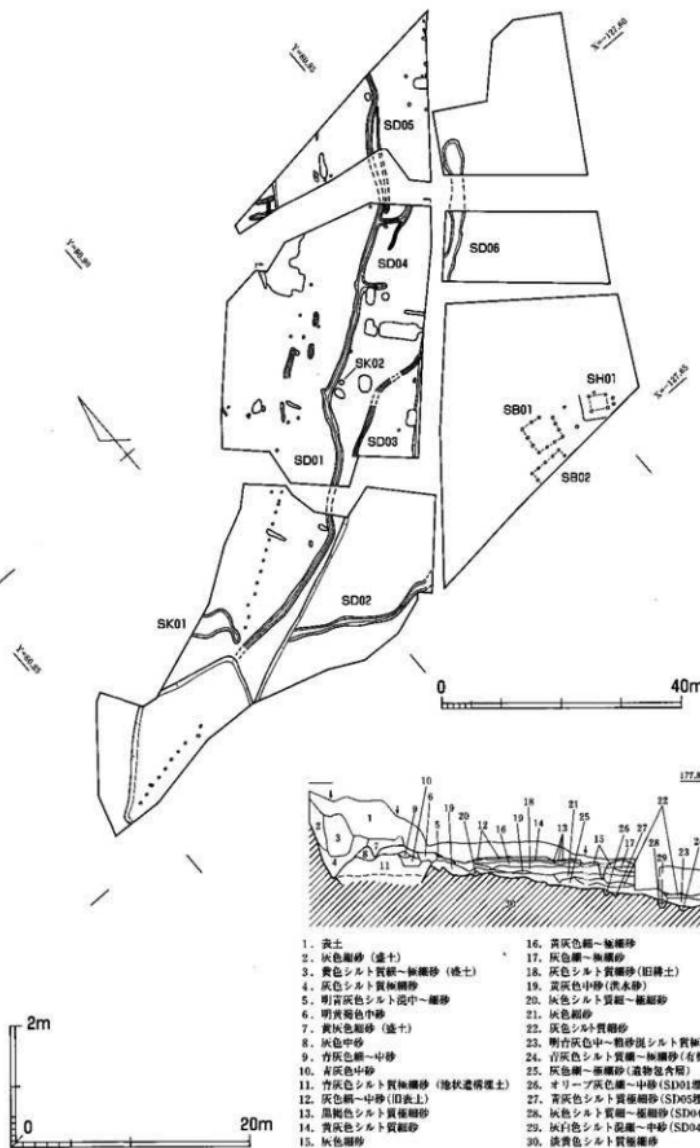
八多中遺跡の調査は、昭和46年に実施した中国縦貫自動車道建設に伴う八多遺跡の調査を最初とする。八多遺跡調査区は、本調査区の北東450mに位置し、調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡の他、古墳時代、中世以降の遺構が検出された。その後遺跡内で発掘調査が行われることはなかったが、道場・八多地区土地区画整理事業が計画され、平成元年度には対象地の確認調査が神戸市教育委員会によって行われた。区画整理事業は八多中遺跡のほぼ全域を対象とし、平成7年に発生した阪神・淡路大震災後、震災復興事業として取り扱われることとなり、平成7年度より兵庫県教育委員会が発掘調査を実施し、平成10年1月現在調査を継続中である。

八多中遺跡の調査は、日本道路公团が用地買収を終了した箇所から開始した。調査最終年度となる平成6年度は工事の進捗に対応して調査を行うこととなり、工事の急ぐ箇所から調査したため、調査区は小間切れ状にならざるを得なかつた。結果として調査は5次、調査区は11地区に分かれることになった。

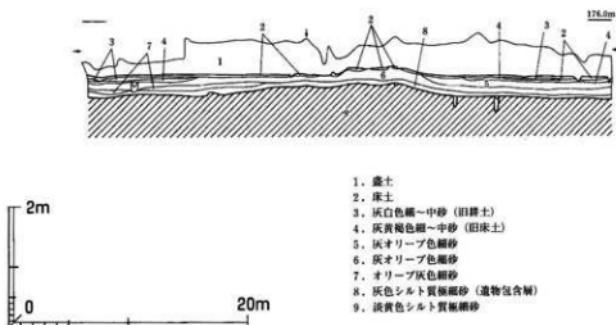
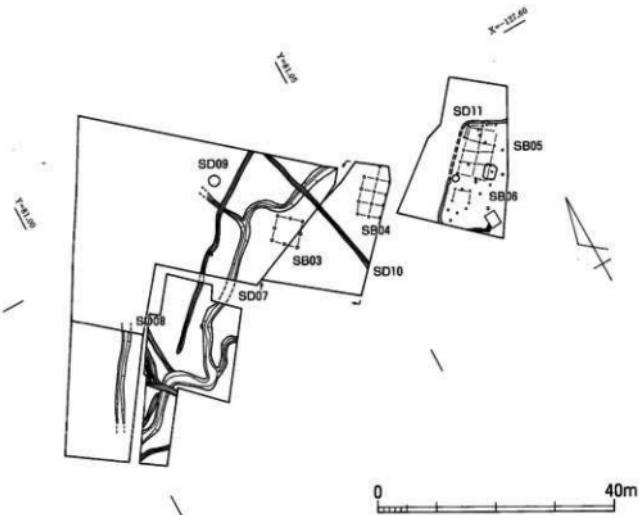
調査地区名については、調査を行った順にA地区から順にJ地区まで命名したものである。したがつて、上記の理由から隣接する地区が必ずしも連続する地区名となっていない。J地区は工事の都合上2次に分けて調査している。また、調査区は調査対象範囲のほぼ中央を通る県道三木三田線を境として北側（A・B・C・D・H・I地区）と南側（E・F・G・J地区）の2地区に大別できる。この南北2地区は地形や出土遺物について違いを見ることができる。本報告ではA～J地区と県道南・北側の両呼称を使用して記述していく。



第4図 調査区地区割図



第5図 県道北側地区平面図・断面図



第6図 県道南側地区平面図・断面図

## 第2節 基本層序

北側の地区ではI地区北壁断面を、南側の地区ではG地区の北～西壁断面を示した。各地区とも比較的単純な堆積状況をみせ、基本的な層序は県道の南北両地区とも同じである。現地表下に灰色系の旧耕土と黄褐色系の旧床土が互層となり、その下にやや粘度をおびた灰色シルト質極細砂層がある。この中には上器片を多く包含している。遺構検出面は北地区では30層、南地区では9層の淡黄色シルト質極細砂である。ただし低湿地の様相をみせる部分ではベースが褐色系の粘質のシルトとなっている。

県道北側の各地区北端部は開墾時の削平が著しく、現耕土直下地山となっている。

## 第3節 遺構

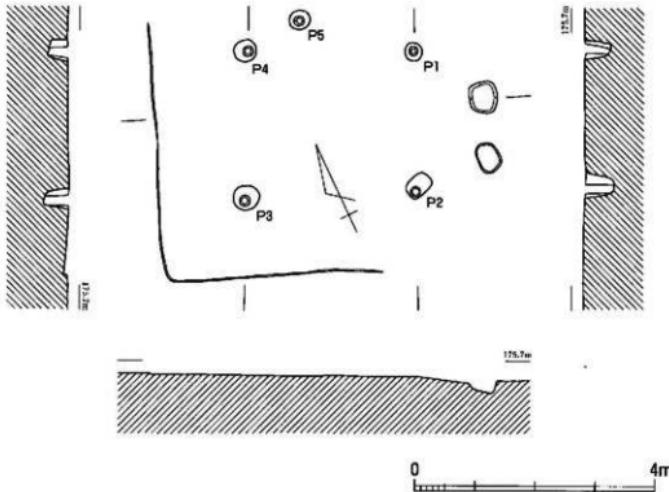
### 1. 壇穴住居跡

#### SH01

I地区の南東隅で検出した。平面形は北辺と東辺が削平を受けて検出されていないが、隅丸方形を呈するようである。規模は検出された長さで南辺3.5m、西辺4.3mをはかり、検出面から床面までの深さは平均で2cmと浅い。

住居の壇土は黄褐色シルト質細砂の1層である。検出面から床面までの深さが浅かったため、層位は確認できなかった。床面からは柱穴5基、焼土坑1基、土坑1基を検出した。

柱穴は、掘り方の平面形が円形または椭円形を呈し、径30～44cm、床面からの深さが28～48cmをはかる。いずれの柱穴も柱痕が確認され、その径は15cm前後である。柱間距離はP1～P2間が2.30m、P2～P3間が2.85m、P3～P4間が2.45m、P4～P5間が1.00m、P5～P1間が1.95m、をはかる。南辺側の柱穴であるP2、P3は壁より1.2m内側に、西辺側の柱穴であるP3、P4は壁より1.4



第7図 SH01

m内側に掘られている。

焼上坑はP1より1.4m、P2より1.9m壁側で検出された。平面形は不整形であるが、隅丸方形に近い形状である。規模は長径50cm、短径45cmをはかる。床面が被熱した状態であることから移動式の竈跡であると考えられる。土坑はP1より2.1m、P2より1.3m壁側で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径50cm、短径35cm、深さ3cmをはかる。

(岡本)

## 2. 挖立柱建物跡

今回の調査では6棟の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物を構成する柱穴以外に柱穴はほとんど検出されず、少なくとも調査区内においては検出された掘立柱建物以外に建物が存在した可能性は低い。また、同じ場所での建て替えが行われた痕跡もなく、継続して居住していたとも考えがたい。

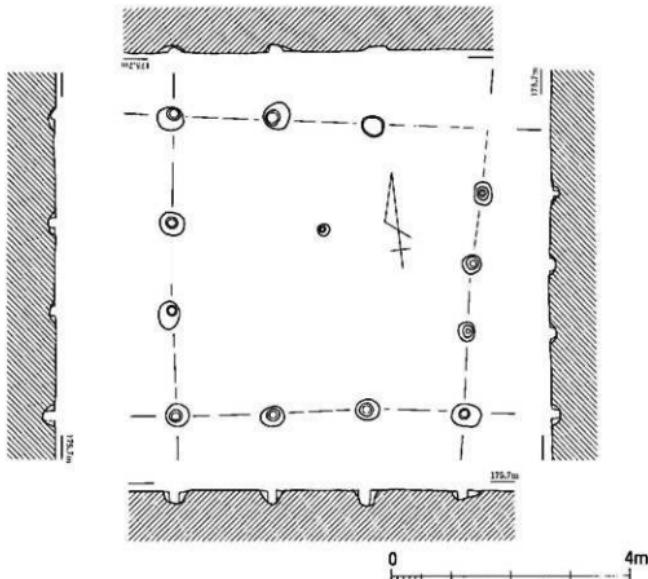
以下各建物の概要を述べる。

### SB01

I地区の南側中央に位置する。N-5°-Eに主軸をもつ桁行2間、梁行2間の割柱建物である。建物の規模は桁行方向が4.7m、5.0m、梁行方向が3.2m、3.4mである。柱穴間の心々距離の平均は桁行が1.6m、梁行が1.6mをはかる。面積は16.9m<sup>2</sup>をはかる。柱穴の掘り方の形状は平面が円形を呈し、直径は38~42cm、柱根の径は16~20cmである。検出面からの深さは10~25cmをはかる。柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・襠板等の存在は確認できなかった。

この建物に伴う遺物は出土していない。

(岡本)



第8図 SB01

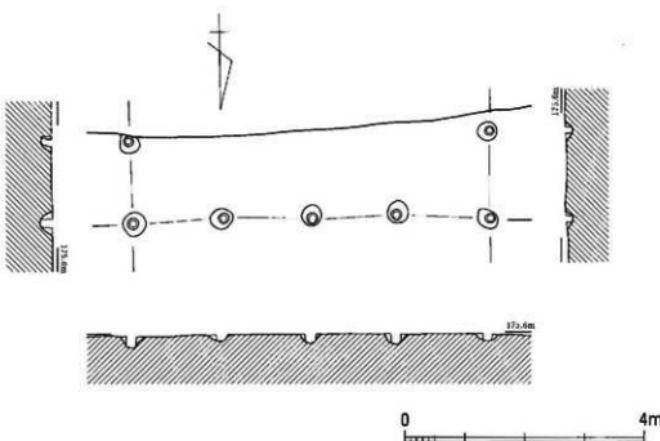
### SB02

I 地区南側中央、SB01の南西側に位置する。南半分が調査区外へ続き、全体の規模は不明である。

ほぼ東西方向に主軸をもつ桁行4間、梁行2間以上の側柱建物である。建物の規模は桁行方向が6.0mである。柱穴間の心々距離の平均は桁行が1.5m、梁行が1.4mをはかる。柱穴の掘り方は平面が円形を呈し、直径は32~40cm、柱痕の径は16~18cmである。検出面らかの深さは15~20cmをはかる。

この建物に伴う遺物は出土していない。

(岡本)



第9図 SB02

### SB03

県道南側のG・J地区にまたがって検出した。SB04の北西約10mの地点に位置する。他の造構との切り合い関係はない。

N-44°-Eに主軸をもつ桁行2間、梁行2間の純柱建物である。

建物の規模は東西方向4.2m、南北方向4.35m確認された。面積は18.1mである。

柱穴間の心々距離の平均値は、東西が2.15m、南北が2.14mである。

柱穴は掘り方の平面形状は方形を意識して掘られている。柱穴のすべてについて、柱根または柱の抜き取り痕跡を確認している。柱穴の掘り方の規模は一辺30~40cm、深さは17~40cmをはかる。柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板等の存在は確認できなかった。

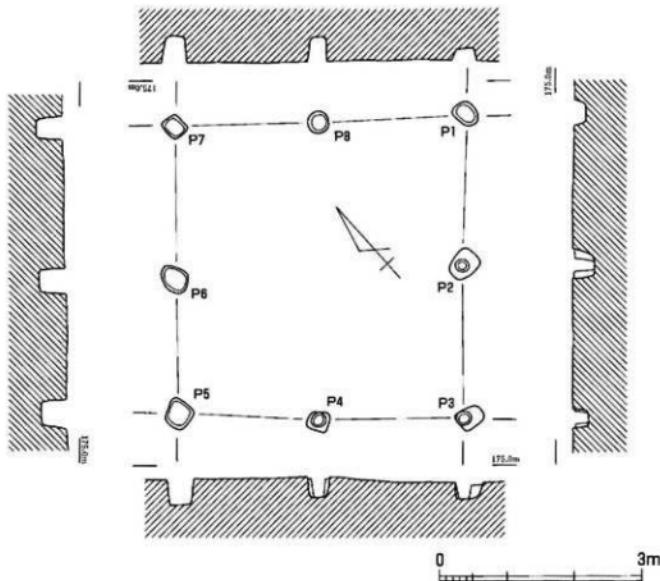
遺物はP 6 底から須恵器碗が1点破碎した状態で出土した。

(長濱)

### SB04

県道南側のG地区の東端で検出した。SB03の南東約10mの地点に位置する。他の造構との切り合い関係は認められない。

ほぼ全掘したと思われるが調査区の制約により、北東と南東側に広がる可能性がある。特に東側では



第10図 SB03

P 2 の延长上に P 13があり、本建物に伴うもの可能性がある。

N-45°-E に主軸をもち、少なくとも桁行 3 間、梁行 2 間の純柱建物となる。

建物の規模は東西方向 6.3m、南北方向 4.2m 確認された。面積は 26.7m<sup>2</sup>である。

柱穴間の心々距離の平均値は、東西が 2.1m、南北が 2.1m である。

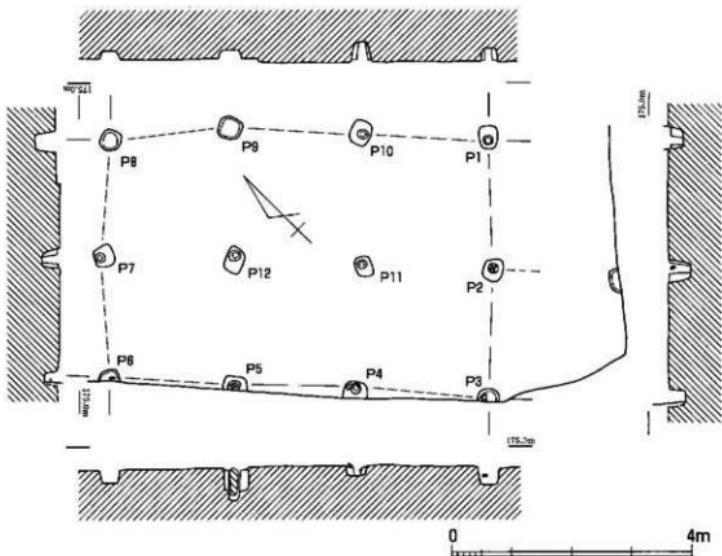
柱穴は掘り方の平面形状は方形を意識して掘られている。柱穴のすべてについて柱根または柱の抜き取り痕跡を確認している。柱穴の掘り方の規模は一辺 35~45cm、深さは 14~55cm をはかる。柱根は P 5 で 1 基残存していた。柱根 (W 1) は、残存長 49cm をはかり、遺存状態は悪いが、最大幅は 14.2cm である。先端 9cm にわたって鋭角に削り出されている。根固めとしての礎石・礎板等は P 2、3、4、6 で確認した。このうち P 2 は根固めに珪化木のブロックを用いている。また、P 2、4 の掘り方内から須恵器碗、白磁碗が出土している。

(長濱)

#### SB05

県道南側、今回の八多中遺跡調査区の最南端に位置する E 地区で検出した。調査区の南側および西側は削平による落ち込みが確認されたため、調査は行っていない。

N-48°-E に主軸をもち、桁行 4 間、梁行 2 間が確認された。部分的に柱穴が確認できなかつた箇所が存在するが純柱建物であったと思われ、南側に続く可能性も考えられる。また、建物に平行しないが、東側に 2 間分、北側に 1 間分の庇と考えられる柱列が確認された他、建物の東、北、西の 3 辺に溝 (SD11) が巡っている。



第11図 SB04

確認された建物の規模は、東西7.9m、南北4.8mをはかる。面積は38.2m<sup>2</sup>である。

柱穴間の心々距離の平均値は、東西が1.9m、南北が2.3mである。

柱穴の掘り形の平面形は円形を呈し、直径は20~30cmをはかる。柱痕あるいは、柱の抜き取り痕跡の直径は12~18cmであり、深さは4~30cmをはかる。

柱穴内から上器片が数点出土したが、実測えるものはなかった。

(仁尾)

#### SB06

SB05の西側で検出した。北側の柱列がSB05の柱列の延長上にあり、SB05と同一建物の可能性も考えられるが、柱穴間の距離が若干長いため、SB06として報告する。

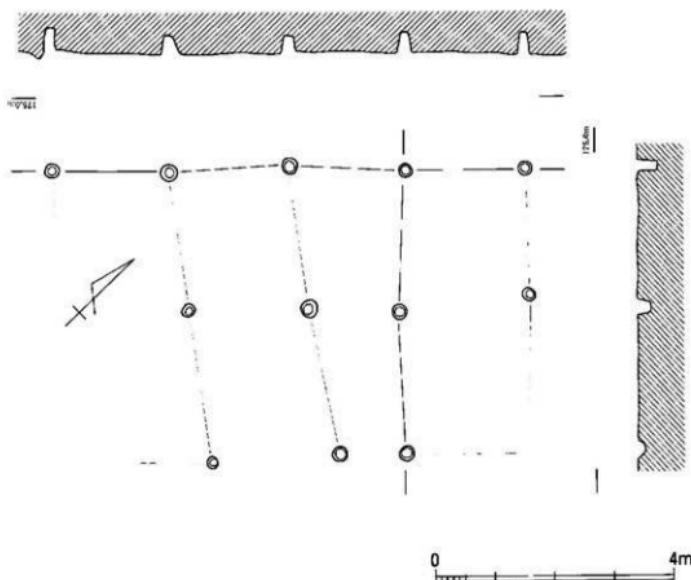
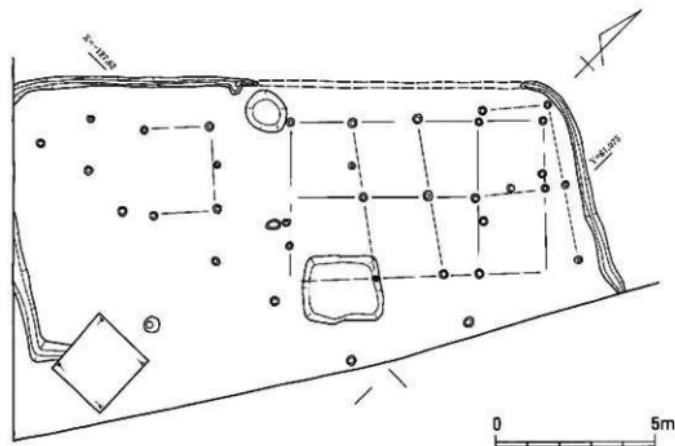
N-48°-Eに主軸をもつ桁行1間、梁行1間の建物である。南側と西側の溝までは空間が広がるため、1間分の柱穴を確認できていないことが考えられる。

柱穴間の心々距離は、東西2.05m、南北2.55mをはかる。

柱穴の掘り方の平面形は円形であり、直径は20~30cmをはかる。柱痕あるいは、柱の抜き取り痕跡の直径は14~18cmであり、深さは6~20cmをはかる。

柱穴内から遺物は出土していない。

(仁尾)



第12図 SB05・06

### 3. 溝

溝は10本以上検出された。その多くは等高線に沿ったもので、若干等高線に直交する方向のものがある。全般的に遺物の出土が少なく、溝の時期は明確にしえないが、何本かの溝は切り合い関係をもつ。また、溝の方位が異なるものは時期差を示すものかもしれない。

#### SD01

県道北側のA・I・B地区にまたがって検出した。北東から南東方向にやや南へ弓なり状にのびる溝である。地形的には丘陵から続く傾斜が比較的緩くなる変換点付近に位置し、ほぼ等高線沿いにのびている。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

本調査区で検出した長さは約100mである。西端はA地区内で水田の地下げにより消滅している。東端はB地区よりもさらに続き、平成7年度に上地区画整理に伴う発掘調査の池尻地区で約20m検出され、さらに東へ続いていることが確認された。これも含めると総延長は200m以上となる。

溝の断面形はU字状を呈する。溝の規模は、幅は最小45cm、最大110cmであるが、概ね65~85cm程度である。溝中央部での検出面からの深さは13~46cmであり、北東側ほど浅くなっている。溝底のレベルはほぼ175.80m台であるが、やや北東端付近では高まる傾向にあり、その標高はA地区からI地区東半部にかけてはほぼ175.83m前後、I地区東端からB地区にかけては175.90m強となる。これは周辺の地形が北東へ傾斜をもつに対し、その逆方向に傾斜していることになる。埋土は2層に大別でき、上層はやや黄をおびたシルト質細砂~極細砂、下層は灰色系のシルト質極細砂である。また、部分的に底に砂の堆積が認められる。

埋土内には奈良時代の須恵器を多く包含している。特にI地区の東半部では残存状態のよい須恵器がまとまって出土している。出土状況は1つの土器群のなかでも溝底に接するものから検出面近くの上層で浮いた状態で出土したものまであるが、それぞれに時期差は認められない。

(長濱)

#### SD02

県道北側のA地区西端で検出した。南北方向にほぼ直線的にはしる溝である。

A地区では、SD01より下層でさらに北へと続いていくものと考えられたが、検出された溝の北端では深さがわずか20cm程度であり、確認調査や口石器時代の遺構・遺物の確認を目的とした断ち割りトレンチで連続する遺構が認められなかつたため、北側への調査は行わなかつた。また、A地区的南側のH地区的調査では、調査区の北端で一部東西方向のなだらかな落ち込みが確認されており、これがSD02に統く可能性が考えられる。

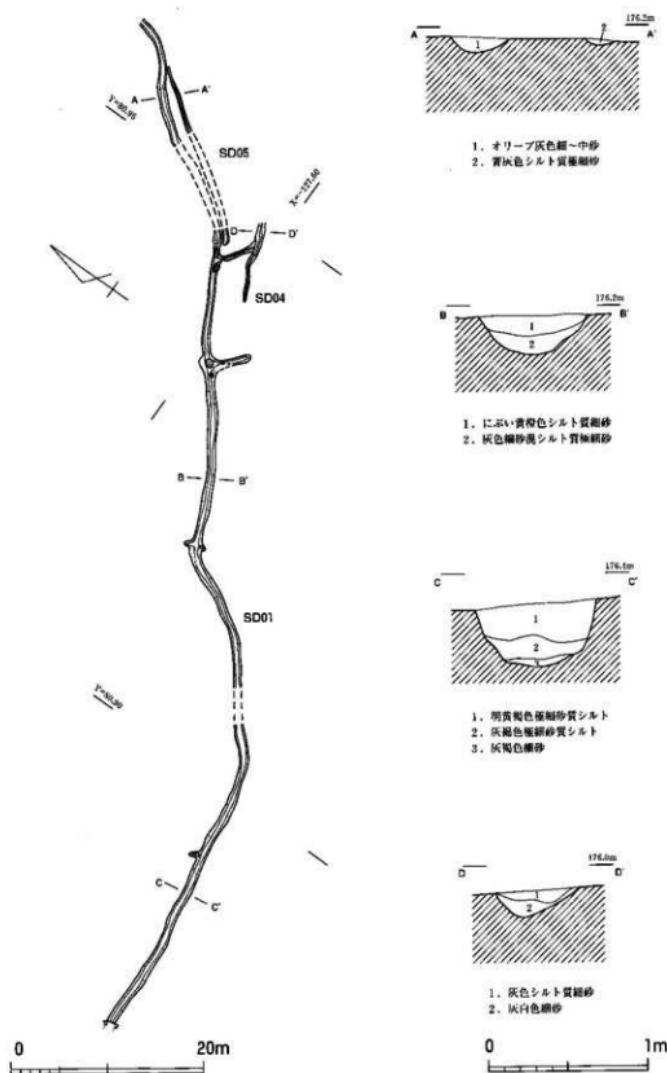
検出した溝の長さは28m、幅80cm~160cm、深さ20~50cmをはかる。溝の断面形はU字状を呈し、埋土は3層に分層される。

溝内から出土した遺物のうち、固化したものは須恵器壺、平瓶であり、いずれも所属時期は飛鳥~奈良時代である。これらが溝の埋没時期をしめすものと考えられる。

(仁尾)

#### SD03

県道北側のI地区南端で検出した。東西方向にほぼ直線的にはしる溝である。擾乱等が多く検出状況は良好ではないが、検出した長さは約20mである。他の遺構との切り合い関係は認められない。東西両端は調査区の制約により、不明であるが隣接する調査区では検出されておらず、両端ともI地区的外側



第13図 SD01・04・05

で消滅するようである。

溝の断面形はU字状を呈する。溝の規模は検出面での幅40~68cm、溝中央部での検出面からの深さは14~19cmであり、地形的に高く削平の度合いの大きい西側ほど浅くなっている。溝底のレベルはわずかに東側が低くなる傾向があり、その標高は西側で175.89m、東側で175.82mをはかる。埋土は粗砂・細砂が混じるにぶい褐色シルト質極細砂であり、底にわずかに中砂の堆積が認められる。

遺物は殆ど出土せず、所属時期は不明である。

(長濱)

#### SD04

I地区の東端、SD01の南東側で検出した。SD01とほぼ平行し、SD01との間を結ぶ溝がある。検出した長さは8.4mである。西端は調査区内で消滅し、東端は調査区の制約のため不明であるが、隣接する調査区では検出されていない。他の遺構との切り合い関係は認められない。

溝の断面形は浅いU字状を呈する。溝の規模は検出面での幅25~63cm、溝中央部での検出面からの深さは1~6cmであり、西側ほど浅くなっている。溝底のレベルは東側ほど低くなる傾向があり、その標高は西側で176.10m、東側で175.71mをはかる。埋土は2層に分層できる。上層はやや土壤化した灰色シルト質細砂、下層は灰白色細砂が堆積している。

溝内から少量の遺物が出土したが、SD01出土のものと同時期の須恵器である。

(長濱)

#### SD05

I地区東端からB地区にまたがって検出した。SD01に隣接し、ほぼ平行する溝である。ほぼ直線的なのび、検出した長さは18.5mである。両端とも調査区内で消滅している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

溝の断面形は浅い皿状を呈する。溝の規模は検出面での幅50~75cm、溝中央部での検出面からの深さは6~16cmをはかり、西側ほど浅くなっている。溝底のレベルはわずかに東に傾く傾向にあり、その標高は西側で196.08m、東側で175.98mをはかる。埋土は青灰色シルト質極細砂が1層堆積している。

溝内から遺物の出上がなく、所属時期は不明であるが、SD01に前後する時期と推定する。(長濱)

#### SD06

C・D地区の北端で検出した。溝はほぼ東西方向にのびているが、C地区内で一方はなだらかにおさまっており、D地区以西に続く溝は確認されていない。

検出された溝の長さは23m、幅1.5~3.4m、深さ10~15cm、をはかる。

埋土の状況や溝の方向から推定すると、D地区以西についてはH地区北端で確認しているなだらかな落ち込みへと続き、A地区で検出されたSD02へとつながる1本の溝となる可能性が高い。

本溝からは遺物の出上がみられなかったが、SD02につづくものならば飛鳥~奈良時代に所属すると考えられる。

(仁尾)

#### SD07

県道南側のF・J地区にまたがって検出した。南側では最大規模の溝である。蛇行しつつ南西から北東方向にのびている。検出した長さは63mである。両端とも調査区外へ続く。SD10と切り合い関係に

あり、SD10に切られている。

溝の断面形はU字状または逆台形を呈する。溝の規模は検出面での幅117~165cm、溝中央部での検出面からの深さは35~47cmであり、南西端付近では浅くなっている。溝底のレベルは北東に傾いており、その標高は南西端で174.59m、東側で174.25mをはかる。埋土は砂層が互層になり、ラミナ状の堆積をみせたり、溝底にローリングの痕跡を見せ、一時に激しい水流があったものと推定される。

溝内から遺物の出土はほとんどない。最上層からは中世に属するとみられる土器の細片が少量出土している。溝底からは古墳時代末の須恵器坏が完形で1点出土している。この坏が溝の機能していた時期を示すのか、単なる流れ込みか明確でない。また、溝の性格も不明である。  
(長濱)

#### SD08

F地区中央付近で検出した。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝である。検出した長さは26mである。両端とも調査区外へ続く。検出した長さは8mである。北端はJ地区へ続くが不明瞭となる。南端はSD07と交わるが、合流するのか、切り合い関係にあるのか明確にできなかった。

溝の断面形は浅いU字状を呈している。溝の規模は検出面での幅40~45cm、溝中央部での検出面からの深さは13~15cmである。溝底のレベルはほぼ水平であり、南北両端ともその標高は南端で174.86mをはかる。埋土は灰白色細砂が単層堆積している。

溝内からは全く遺物が出土していないため、所属時期は不明である。

(長濱)

#### SD09

F・J地区にまたがって検出した。SD07の北側に隣接し、ほぼ平行して直線的に南西から北東方向にのびている。検出した長さは36mである。東端は調査区外へ続き、西端はF地区中央付近で消滅する。SD07に合流する溝と切り合い関係にあり、SD09が切っている。したがってSD07とは直接切り合ひ関係にないが、SD07より後出する可能性がある。

溝の断面形は浅いU字状を呈する。溝の規模は検出面での幅30~60cm、溝中央部での検出面からの深さは2~12cmであり、J地区東端付近では浅くなる傾向にある。溝底のレベルは北東に傾いており、その標高は南西端で174.93m、東側で174.59mをはかる。埋土は上下2層からなり、上層は褐灰色シルト質極細砂、下層は灰白色シルト質細砂である。

溝内からは遺物が出土していないため、明確な所属時期は不明である。

(長濱)

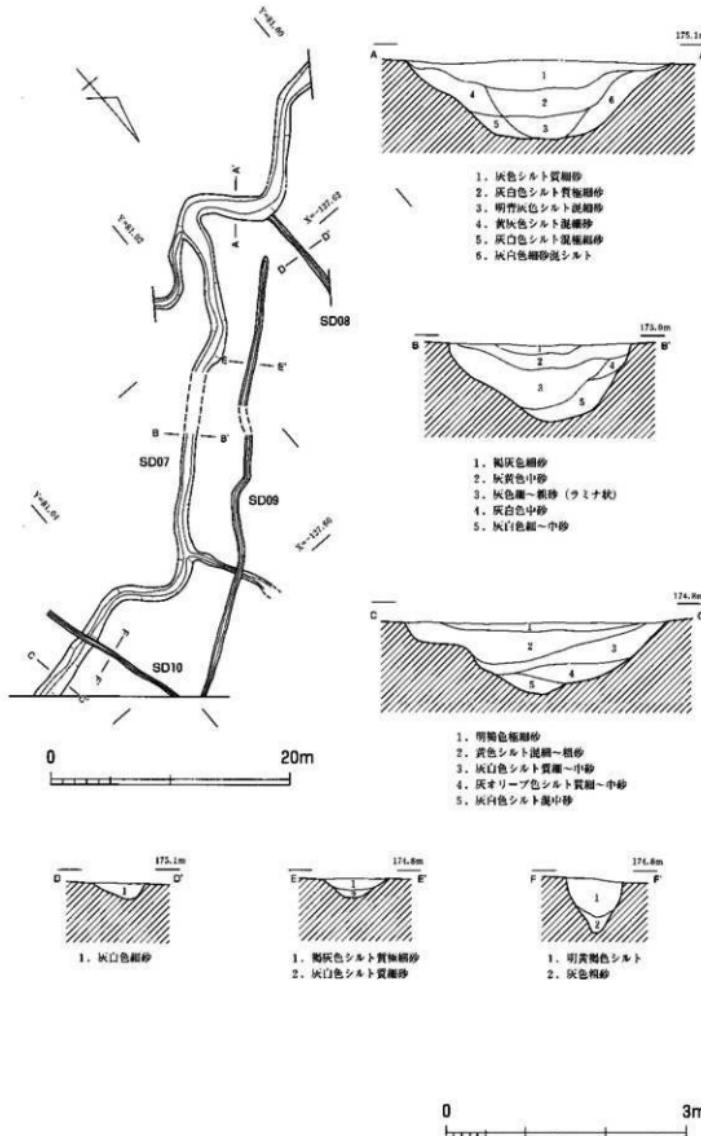
#### SD10

G・J地区的東端付近で検出した。南北方向から約17°東に偏り、ほぼ直線的にのびる溝である。検出した長さは26mである。両端とも調査区外へ続く。SD07と切り合い関係にあり、SD07を切っている。

溝の断面形は他の溝と異なりV字状を呈している。溝の規模は検出面での幅19~35cm、溝中央部での検出面からの深さは19~33cmであり、南西端付近では浅くなっている。溝底のレベルは北に傾いており、その標高は南端で174.49m、北側で174.39mをはかる。埋土は上下2層からなり、上層は明黄褐色シルト、下層は灰色細砂である。

溝内からは全く遺物が出土していないため、所属時期は不明である。

(長濱)



第14図 SD07・08・09・10

## SD11

県道南側のE地区で、掘立柱建物（SB05・06）を開こうように東、北、西の3辺より検出した溝である。南西角より一部南辺の溝が確認されたが、東へは続いておらず、コ字状に溝は巡っている。東側の溝はSB05と平行しないが、庇と考えられる柱列と平行している。北側の溝は建物に平行する直線的な溝であるが、一部削平を受けている。溝の性格は区画溝または雨落ち溝と推定される。

調査区内で検出された溝の長さは約29m、幅は30~50cmである。溝の断面形は浅いU字状を呈し、深さは6~22cmである。

溝内からは擂鉢片が1点出土している。体部の小破片のため図化しえなかったが、形態等から15世紀後半に属する丹波焼擂鉢と思われる。  
(仁尾)

## 4. 土 坑

土坑は各地区とも少量が検出されたにすぎない。I地区では平面形が円形や方形を呈する掘り込みが數カ所で検出され、近世丹波焼擂鉢等が出土した。ただし、埋土の状態が新しかったため全てについて断ち割りを行ったところガラス片が出土するものがあり、近現代のものと判断し全掘はしていない。

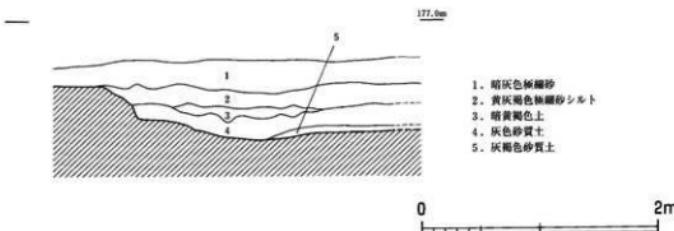
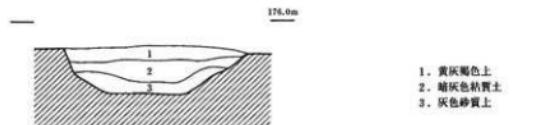
## SK01

A地区のSD01が途切れた北側、調査区の東壁際で検出した。調査区外へ続くものであり、全体の大きさ等は不明である。また、上層は近現代の排水施設による擾乱を受けている。

検出された平面形は、長径約7.6m、短径約3.6mの不整形な梢円形を呈する。埋土は5層にわたって堆積しており、深さは65cmをはかる。

造構内から遺物は出土していないため、所属時期は不明である。

(仁尾)



第15図 SD02、SK01断面図

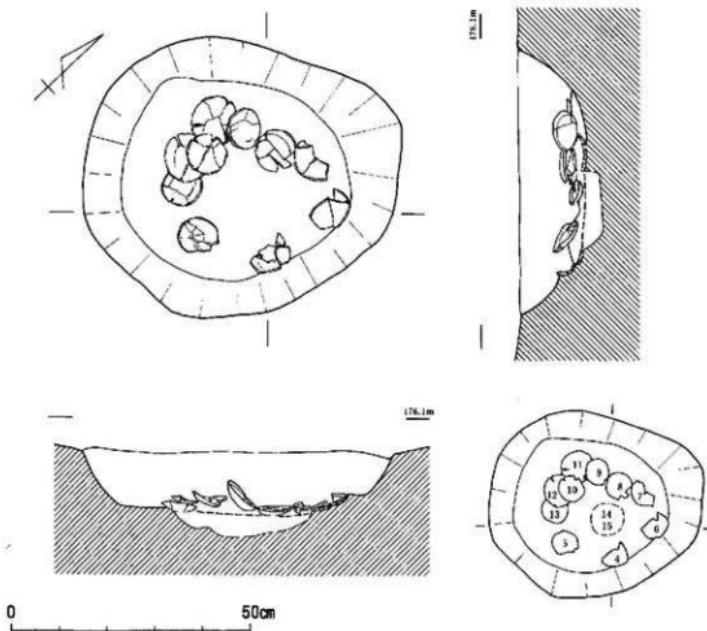
## SK02

I 地区中央付近、SD01の南側肩付近で検出した。N-45°-Eに主軸をもつ平面形がやや不整な楕円を呈する土坑である。長径65cm、短径56cmをはかる。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは9~15cmである。底部は多少起伏をもつが、標高176.02~05m程度ではほぼ水平である。堆上は遺構面構成土をブロック状に含む灰色シルト混細砂である。

土坑底部には土師器小皿が並べられている。一部不注意で取り上げたため、本来の配列は不明であるが、合計12枚が埋納されていた。

小皿は東半部の5枚は2列で上下に2段ないし3段に重ねられていたと推測できる。西側の7枚は底に1枚ずつ並べられていたようである。図には5枚しか示していないが中央の空白部に取り上げた2枚が置かれていた。土師器小皿以外には遺物の出土はみられなかったが、有機物が埋納されていたとみられ、土坑底がやや黒く変色した部分が確認できた。

土坑の性格であるが、地頭に間違するものと推定する。なお、周辺に土坑に伴うと思われる遺構は確認していない。SK02の埋土の状態は、I 地区内にみられる近世の掘り込み埋土の土色や土質に似たものであるため、あるいはこの場所が屋敷地となった時期に埋納された可能性がある。  
(長浜)



第16図 SK02

## 第4節 遺物

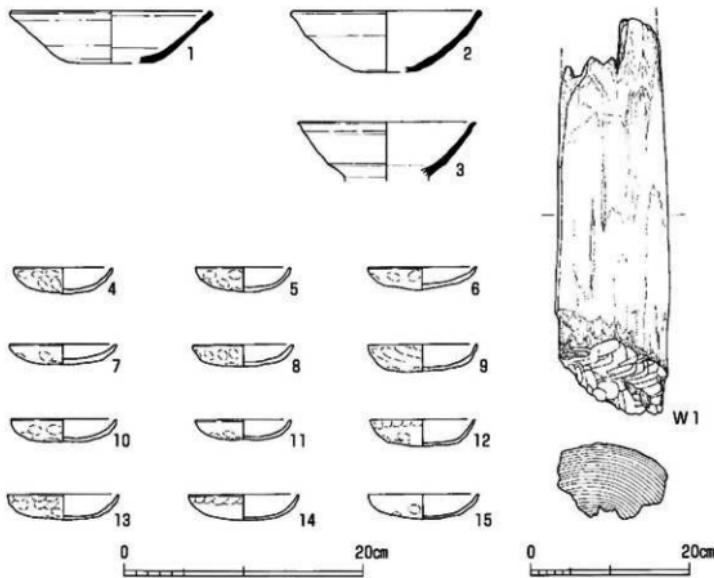
八多中遺跡からはコンテナ（セキスイ TS28）16箱の遺物が出土した。須恵器片、土師器片の出上が大半を占める。瓦器片は各地区で数片の細片をみたのみである。出土遺物の大半は遺物包含層から出土したもので、遺構から出土したものはない。

出土遺物のうちで比較的まとまりをもつ飛鳥～奈良時代に属する須恵器についての器種名、調整方法は『平城宮発掘調査報告』に従って記述している。ただし、一部の器種名については『七日市遺跡（I）』に従ったものもある。

出土遺物のうち実測しえなかつた遺物の概観を述べる。須恵器は調査区の全域で見られた。時期的には中世に属するものが多く、遺物包含層を中心に出土している。器種的にはこね鉢や碗が多い。圓化したものはないが、こね鉢の中でも口縁端部を上下に拡張したものが目につく。土師器は胎土を観察すると砂礫を含まない精良なものが多く、3mm程度の繩を多く含むものが少量ある。器種では鍋類が最も多い。鍋では口縁端部が水平な面をもつもの、玉縁状に肥厚するものがある。陶磁器類の出土は少ない。その中でも出土量が多いのは近世丹波燒鐵鉢の破片である。

金属器では銅鏡で元豐通寶（M4）、寛永通寶（M5）が各1点遺物包含層内から出土しているが遺存状態が悪いため写真撮影のみにとどめた。また石器・石製品が3点遺物包含層から出土しているが、清水廻り遺跡出土遺物の項で記述している。

(1)～(3)はSB03・04の柱穴内から出土したものである。(1)・(2)は須恵器碗である。(1)はSB03P



第17図 据立柱建物、土坑出土土器・木器

6から出土した。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚し、端部は丸くおさめている。底部外面は平坦であり、内面はわずかに凹んでいる。復元径は16.5cmである。(2)はSB04P2から出土した。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外側へつまみ出しつつ丸くおさめている。底部外面は平坦であり、内面は明瞭でないが凹みをもつ。復元径は15.6cmである。(3)はSB04P4から出土した須恵器である。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面とも施釉するが体部下半と底部内面は露胎である。

(4)～(15)はSK02から出土した土師器小皿である。出土した12枚全てを図化した。いずれも所謂非ロクロ系のもので、口径は7.85～9.20cmとばらついているが数的には9cm前後が多い。丸みのある底部から口縁は内彎して立ち上がるタイプが多い。(9)、(12)は底部が平底気味である。(10)は底部に灯心の焼が付着しており、燈明皿として使用されていたと思われる。

今回の八多中遺跡の調査では溝および遺物包含層から多数の須恵器が出土している。出土した須恵器のうち図化できたものは合計47点である。この中には墨書き器が2点含まれている。所属年代は古墳時代から中世と多岐にわたっている。古墳時代の須恵器は壺、把手付鉢が出上している。飛鳥時代の須恵器は壺A、壺B、壺B蓋、壺G、壺G蓋、壺H、壺I、壺Jが出土している。奈良時代の須恵器は壺A、壺B、壺B蓋、壺B、台付鉢、平瓶等が出土している。

SD01からは飛鳥時代を中心とする7世紀後半から8世紀頃の須恵器が多く出土している。飛鳥時代の須恵器では壺A(27、30、31)、壺B(33、34)、壺B蓋(14、20、21)、壺G(25、23、22、32、45)、壺G蓋(17、16、18)、壺I(28、46)、長頸壺(37)を図化した。壺Aは内彎気味に立ち上がる口縁部と丸みのある底部をもつ。(31)は底部に「|:|」の墨書きがある。2文字日は表面が粗いヘラ切りのため墨がかされて明瞭でないが、「亥」の可能性がある。壺B蓋は内面にかえりと偏平な宝珠状のつまみをもつ。壺Bは高台の断面形が台形で著しく外側へ開く。壺G蓋は、天井部は偏平で外側は半分ほどヘラ削りされている。つまみの形は宝珠形である。(18)は天井部が丸みを持ち、半分がヘラ削りされており、やや偏平である。壺Gは底部がヘラ削りされている。長頸壺は頭部のみ出土している。

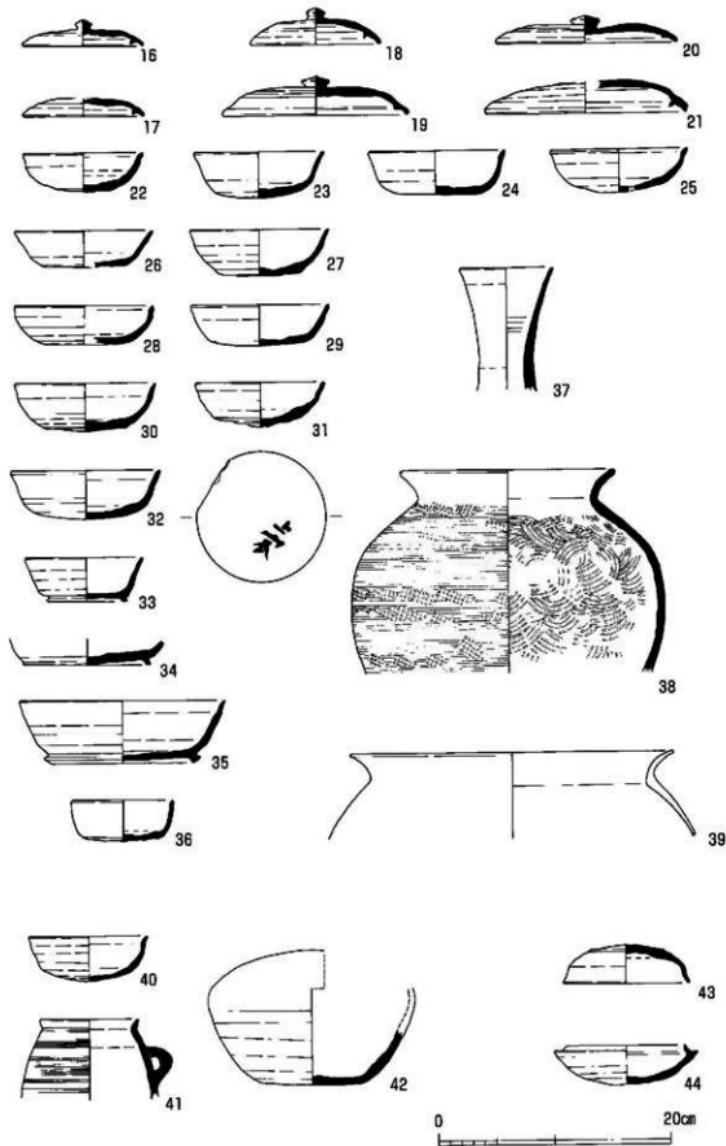
奈良時代の須恵器では壺A(23、24、25、26、29、32)、壺B(33、35)を図化した。壺Aは底部が平坦で、口縁部が斜上に真っ直ぐに立ち上がる。底部外面にはヘラ切り痕が残る。壺B蓋は天井部の半分以上にヘラ削りが施され、天井部内面にかえりがある。壺Bは大小2種あり、大きい方は口径が17.5cmで口縁部と底部の境に外側へ向かって開いた状態の高台が付けられている。小さい方は口径が9.9cmで底部の外周部に高台が付いている。

SD01からは土師器壺(39)も1点出土しているが、内外面とも磨滅しており調整は不明である。

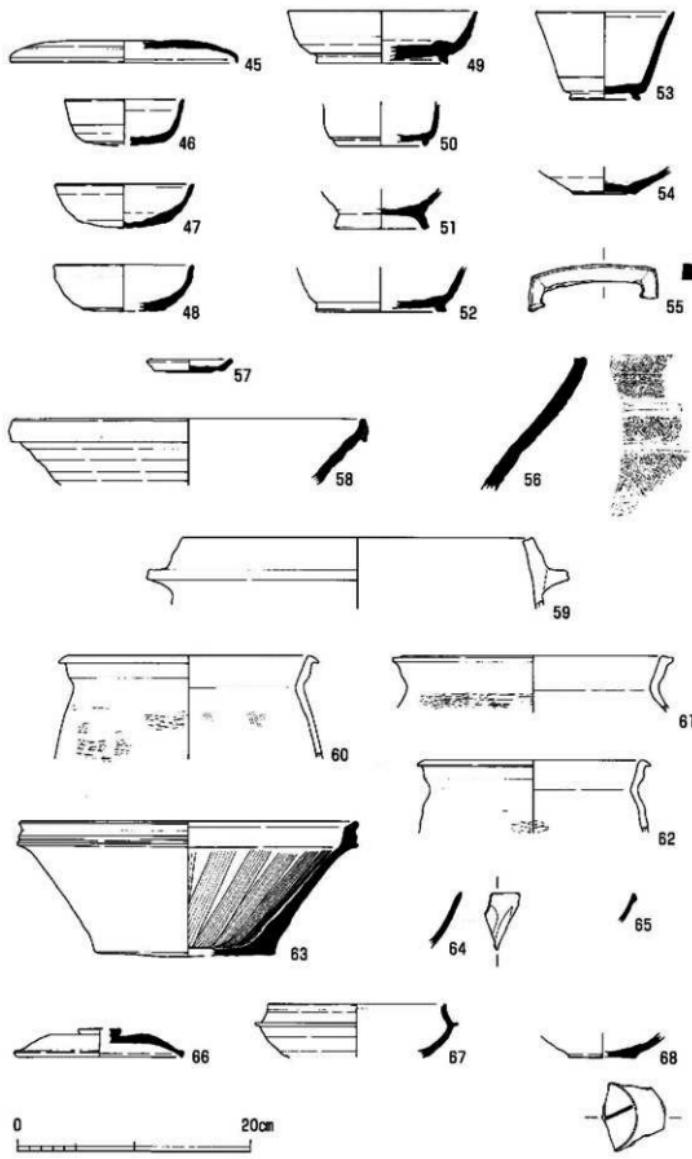
SD02からは壺G(40)、把手付鉢(41)、平瓶(42)が出土している。(40)は底部がヘラ切り未調整で丸みをもつ。(41)は把手と体部の一部が出土している。体部は内彎しており残存部の全体の表面は粗いカキ目が施されており、間に円線が3本確認できる。口縁部は外反している。型式は不明である。(42)は体部のみの出土である。底部はヘラ削りされており、把手は付けられていない。(40)、(42)は飛鳥時代、(41)は古墳時代に属する。

SD05からは壺II蓋(43)が出土している。口径は10.7cmと小さく天井部は丸みをもつ。口縁部は外反している。ヘラ削りは天井部の半分まで施されており、削りの方向は時計回りである。山辺昭三福年のTK217型式併行と考えられる。

SD07からは壺II(44)が出土している。底部に丸みをもち、受け部は小さく、著しく内反している。



第18図 溝出土土器



第19圖 遺物包含層出土土器

TK217型式併行と考えられる。

(45)～(68)は遺物包含層から出土した土器である。

遺物包含層出土の須恵器のうち、中世以前に属するものは主に県道北側地区から出土している。県道南側からの出土は極少量である。出土した須恵器のうち坏B (49、50)、坏B蓋 (45)、椀B (53)、坏L (67)、台付鉢 (51)、甕 (56)、平瓶 (55) を図化した。坏Bは底部をヘラ切りした後に高台を貼ついている。(50)は口縁部が底部に対してほぼ垂直に立ち上がるタイプである。坏B蓋(45)はかえりを持たないタイプでつまみの部分は欠損していた。椀B (53)は坏Bを深くしたタイプの器形で、ヘラ切りした底部に高台がつき、口縁部は直線的に立ち上がる。台付鉢(51)は底部のみが出土している。平瓶(55)は把手のみが出土している。甕(56)は口縁部のみの出土であるが、その外面には波状文が3本と凹線が3本交互に巡らされているのが確認できる。波状文の単位は口縁部端より下に7条、11条、11条となっている。一番上の波状文は一度施文した後にならへる交差するように更に施文している。

椀(54)は底部が糸切りベタ高台で見込み部分が凹んでいる。鉢(58)は体部が直線的に立ち上がり、端部は上下に拡張している。

坏身(40)は県道南側の包含層から出土した。立ち上がりは内傾し、端面は内側に傾斜し浅く凹んでいる。受け部はほぼ水平に外側へと伸びる。底部全体の約1/3にヘラ削りが施されている。田辺昭三編年のMT15型式併行と考えられる。

坏(66)は県道南側の地区から出土したものである。金属器（佐波理輪）の形態を写した坏で、天井部が平らで直径3.4cmの環状のつまみをもつ。端部には稜角がある。

椀(68)は体部は底部近くでは外反し、それより上は内彎している。底部は回転糸切りで墨書きが施されている。墨書きは縱方向に直線が書かれているが、欠損しており文字か記号か判断できない。

(59)は土器器羽釜である。鉢部が若干上反し、端面は平坦である。口縁は内傾し、端面は平坦をなす。復元径29.8cmをはかる。(60)～(62)は土器器鍋である。(53)・(54)は口縁部が外に開くものである。口縁端部は外側へつまみ出され、端面は平坦となる。体部外面は平行タタキが施され、(53)は部分的に施されている。(61)も同様の形態であるが、やや口縁が肥厚する。体部外面には平行タタキが施される。

(63)は丹波焼擂鉢である。近世以降の掘り込み内から出土している。幅の広い口縁部外面に2条の沈線をもち、内面の口縁端部直下に平坦面をもつ。体部内面は櫛状工具により8条一単位の擂目をもつ。見込み部には擂目に一をつけた後外周に円を描いている。時期は17世紀末～18世紀中頃までを想定しうる。

(64)は青磁碗である。口縁端部はとがりぎみに納まっている。体部外面には蓮華文を施文している。

(65)は白磁碗である。口縁部が正縁状に肥厚している。色調は灰白色を帯びている。

## 第5節 小 結

山陽自動車道建設に伴う今回の調査で認めうる最も古い遺物は弥生時代と推定される石器であるが、出土状態から判断して背後の丘陵等他所からの流れ込みと思われる。調査の際、段丘部分の深掘りを行ったところ、造構面を形成する層の下には湿地性の土壤が堆積し、その層内から弥生土器片が出土している。弥生時代においては、調査地周辺はまだ生活域とはなりえなかったと考える。

検出された遺構で最も古いものはSH01であり、住居の形態から古墳時代と推定している。また残存状態のよい古墳時代後期に属する須恵器が調査区内の各所から少量ながら出土している。八多中遺跡に

おける最初の生活の痕跡はこの時期である。飛鳥～奈良時代に入るとSD01を中心に出土遺物が増大するが、調査区内では遺物の出土量に比べて、溝以外にこの時期の遺構が全く検出されず、生活域は調査範囲外に想定せざるを得ない。ただし、平成7・8年度に隣接地の発掘調査を行ったが、該当する時期の建物等の遺構は検出されなかった。

遺構・遺物の大半は古代末～中世に属するものである。今回の調査で検出した掘立柱建物をはじめ、隣接地の調査で検出された遺構・遺物の主体となるものはこの時期のものである。この地域が本格的に居住域となったのは中世に入ってからであろう。建物は2棟程度の単位で散在しており、建物に付帯する施設は僅かにSB05・06で建物を囲う溝を検出したのみである。

これらの調査結果は、遺跡内の他の調査結果、また、同じ八多川流域の上小名田遺跡、下小名田遺跡の傾向とも大きく異なることはない。八多川流域は平安から中世の段階で本格的に開発が進み、生活域が拡大したのである。

しかし今回の調査区は、中世段階で居住域となり、数棟の掘立柱建物が存在したもの段丘上に位置する遺構面上には洪水砂の堆積や水流の痕跡がみられ、八多川の氾濫によって、この地は必ずしも安定した土地ではなかったことが伺える。調査区内にかけて居住していた住民の話では、先祖はかけて八多川に近い場所に住んでいたが洪水によって家を流され、江戸時代頃に住まいをより高い場所に移したと伝えられているそうである。検出された掘立柱建物跡がすべて建て替えた痕跡が見られないのはこうした理由によるものであろうか。これを裏付けるかのように平成7・8年に調査された本調査区北側のより高い場所では建て替えたある建物も含めて複数の掘立柱建物跡や多数の柱穴を検出している。

八多中遺跡内の地形を観察すると、大きく2つの扇状地が確認できる。北側の扇状地は規模も大きく、平成7・8年度に一部を調査したところ、多数の柱穴が検出され、奈良～中世の遺物が出土している。南側の扇状地が今回調査を実施した箇所にあたり、本報告とのおりの成果を得ている。ただし本調査区は扇状地の崩壊部分にあたり、扇状地上に比べて遺構密度は低い。これら扇状地の間は谷状地となり、隣接地の調査結果でも遺構等はさほど検出されていない。また、本調査区のうち、扇状地と段丘の境界となる県道付近は湿地の様相を呈し、グライ化した土壤となっている。この付近では遺構はほとんど検出されず、県道の南北にまたがる遺構も存在しない。遺跡の範囲は広いものの、居住域はその中でも狭い範囲に限定され、おのずと数棟の建物を一単位とする散村状の集落の形態となってくるのであろう。なお、今回の調査区が位置する扇状地の南側にも小規模な扇状地があり、その上に清水廻り遺跡が立地している。

今回の調査は山陽自動車道路線部分についてのみ実施したものであり、八多中遺跡の南端の一部にすぎない。本報告書作成段階では周辺地域の発掘調査が進んでおり、八多中遺跡のより面的な成果が得られつつある。それらの成果については将来別途報告の予定である。

## 第4章 清水廻り遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

清水廻り遺跡は、八多中遺跡の西約250mに位置する。しかし、周辺の地形を観察すると両遺跡の間は、南北は丘陵と八多川によって狭められ、しかも谷状地をはさんでいる。確認調査の結果からも八多中遺跡の調査区と本調査区の間で明確な造構は検出されていない。そのため別の遺跡として取り扱っている。また、清水廻り遺跡は調査区外の広大な範囲に広がることも考えがたく、ほぼ調査区の範囲におさまる小規模な遺跡である。

清水廻り遺跡調査区の北西に隣接する谷はせき止められ、調査時にはため池となっていたが、この堤堤下には2基の須恵器窯から成る小名田窯跡が所在する。小名田窯跡も山陽自動車道の路線内に位置するため、平成5年度に発掘調査を実施し、その調査成果はすでに報告されている。それによれば、ため池堤の構築により窯体が消滅し、灰原のみが残存する1号窯と窯体の一部が残存した2号窯の2基が検出された。いずれも12世紀末～15世紀前半の短期間に操業している。灰原から出土した遺物は塊が大部分を占め、小皿が少量ある。窯跡と清水廻り遺跡とは距離的にはわずか数十m離れるだけであり、所属時期も重複することから、調査時より両者が関連した遺跡であることが指摘されている。

本調査区の地目は水田であるが、周辺は古くから耕田として造成・耕作されており、旧地形の改変が著しい。遺跡は、その北側を東西に延びる丘陵の主尾根から、南向きに派生した支尾根の先端に接する微高地上に立地している。この微高地は、本米南向きに緩やかな傾斜をもっていたものと思われ、その先端は八多川の沖積地に対して段階化している。海拔は、遺跡中央付近で約181mをはかる。

### 第2節 基本層序

清水廻り遺跡の層序は、比較的単純な堆積状況をみせ、基本的な層序は耕土、床土、遺物包含層、地山の順である。部分的に床土と遺物包含層との間に近世の水田造成時の整地層が存在する。遺物包含層は土壤化の進んだ灰褐色砂質シルト層である。地山はにぶい黄褐色シルト質極細砂であるが、丘陵裾にあたる調査区北端では部分的に細砂岩の岩盤がベースとなる部分がある。

造構は、主として地山の上面で検出されたが、調査区北西部では耕土直下で近世の造構面が検出された。現地表面から造構面までの深度は30～50cmである。

### 第3節 遺構

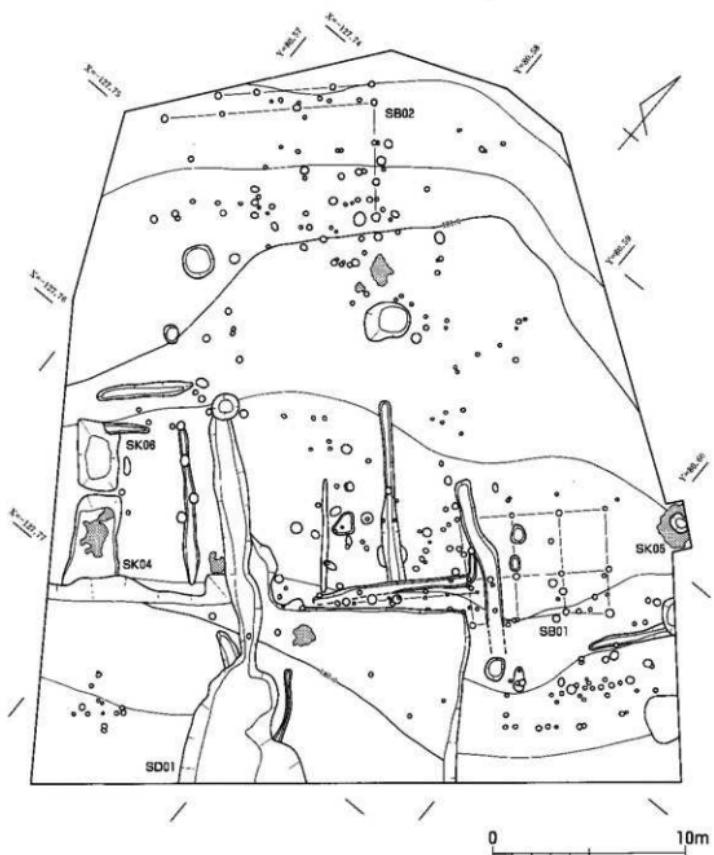
清水廻り遺跡で検出された遺構は、2時期に大別できる。その大部分は12世紀末～13世紀の掘立柱建物跡をはじめとする中世の造構群であり、調査区のほぼ全域にわたって遺構が分布している。一方、土坑・溝からなる近世の造構群は、調査区北西部の限定了範囲にのみ検出された。以下時期別に主な造構の記述を行う。

#### 1. 近世の造構

##### 土 坑

##### SK01

直径1.7m、深さ37cmをはかる、円形の土坑である。土坑底は、楕底状を呈する。土坑内は強い火熱を



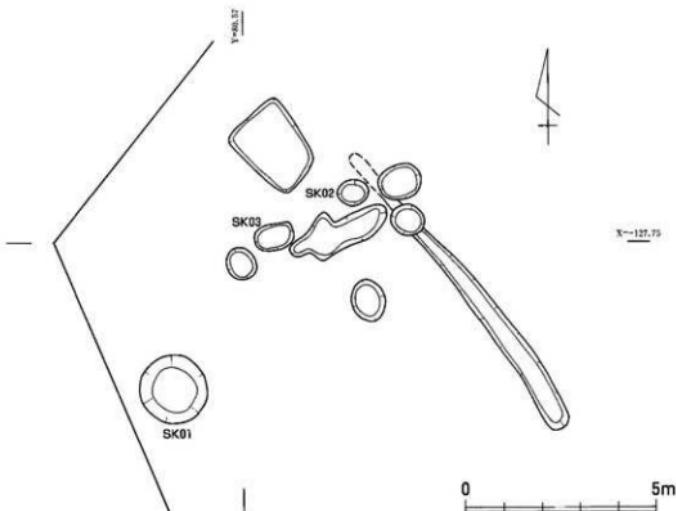
第20図 調査区平面図

受けて赤色化しており、特に土坑壁上部で顕著である。土坑の壁は通常では削れないほど硬化している。

土坑内は人為的堆積と考えられる埋土で充填されており、土坑廃棄時に一括して埋め戻されたようである。その埋土内より甕（M1）が1点出土している。また、土坑底から砾石、瓦片、拳大の礫が数個出土した他に遺物は出土していない。

#### SK02

長径78cm、短径68cm、深さ13cmをはかる。不整円形の土坑である。土坑底は皿状を呈し、やや偏った位置に、丹波焼の甕1点が直立した状態で埋設されていた。検出状況等から、甕は底部～体部1/3程度が、土坑内に埋設・固定されていたものとみられる。水甕の用途をもっていたと考えられる。



第21図 近世遺構群配置図

#### SK03

長径103cm、短径60cm、深さ12cmをはかる。不整長楕円形の浅い掘り込みの内部に、さらに長径54cm、短径40cm、深さ36cmの楕円形の掘り込みを設けた土坑である。内側の土坑は、その外周約1/2に、半円形に石組みを巡らせ、そこから土坑底まで、急傾斜の掘り込みを見せている。土坑底から土坑中位にかけて、数点の丸木材が組まれていたが、劣化が著しいため、詳細な構造は明らかにできなかった。

## 2. 中世の遺構

中世の遺構は、調査区のほぼ全域から検出された。遺構分布の中核は、調査区東部と西部にあって、北部・南部ではやや分布密度が低い。

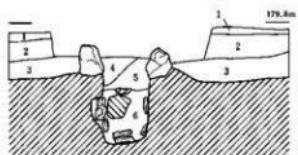
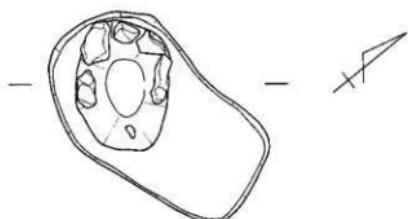
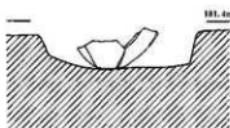
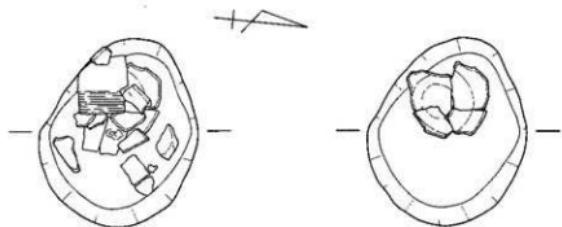
検出された遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸状遺構等である。掘立柱建物2棟は、調査区の東部と西部に位置しており、これにはさまれた中央部には、溝、土坑がまとまって分布している。溝は概ね等高線に直行する方向に延びており、等高線に平行するものは数条が認められる。遺構の遺存状況は全般に良好であり、柱穴内には柱根が遺存している例も少なくなかった。

#### 掘立柱建物跡

#### SB01

調査区東部で検出された。2間×3間の縦柱建物である。長軸は等高線にはほぼ平行しており、北東-南西方向にある。北西半の短軸方向の柱間は、南東よりも大きく、偏った柱穴配置となっている。柱間の平均距離は、長軸方向で2.3m、南西短軸方向で2.1m、北東短軸方向で2.6mであり、建物の全体規模は長軸7.8m、短軸5.2mをはかり、面積は40.5m<sup>2</sup>である。

SB01の南東側には、柱穴の密集が認められ、建物の規模はさらに広がる可能性もあるが、復元には



1. 雲灰褐色土
2. 灰褐色土
3. 青褐色土
4. 墓青褐色土
5. 灰色土
6. 墓灰褐色土

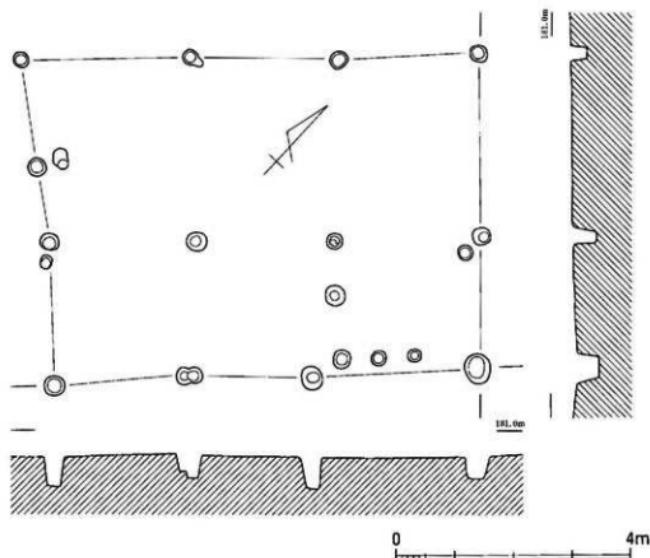


第22図 SK02・03

至らなかった。

#### SB02

副金区西部で検出された。調査区の他の部分より柱穴の分布密度が高く、柱穴の分布状況から、掘立



第23図 SB01

柱建物跡が存在したものと考えたが、全体の復元には至らなかった。2~3間×3間以上の規模をもつものと思われる。西辺の柱穴列の延長は11mをはかり、SB01を上回る規模の建物となる可能性がある。また、SB02の西側には、これに平行して柱穴列が認められ、横状の外周施設が存在した可能性が高い。

### 土 坑

調査区内では十数基の土坑が検出されたが、ここでは特記すべきもののみ記述する。

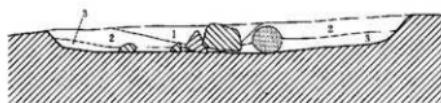
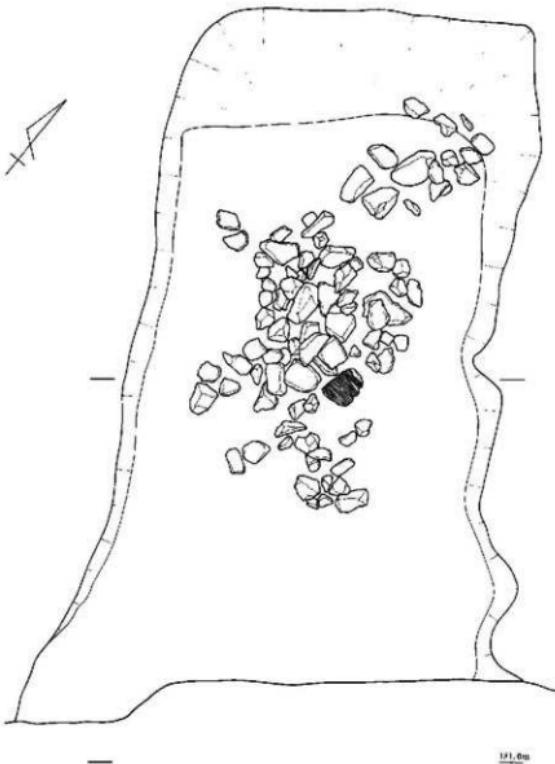
#### SK04

調査区の南部で検出された。平面形は不整長方形を呈し、検出長4.1m、幅2.3mをはかる。深さは15cmをはかり、断面形は逆台形を呈する。南東側は水田の段差のため切断されている。

土坑の中央付近に掌大の甕數十個が集中する部分があり、甕に混じって須恵器碗26枚が融着した資料が出土した。出土状況からは、碗は甕と一緒に投入されたものと考えられる。

#### SK05

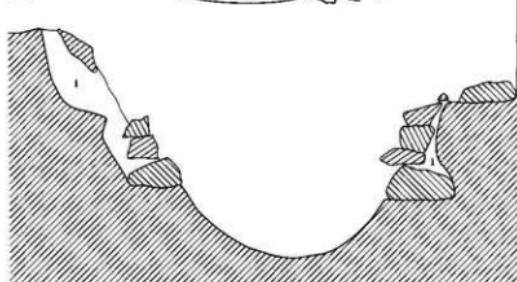
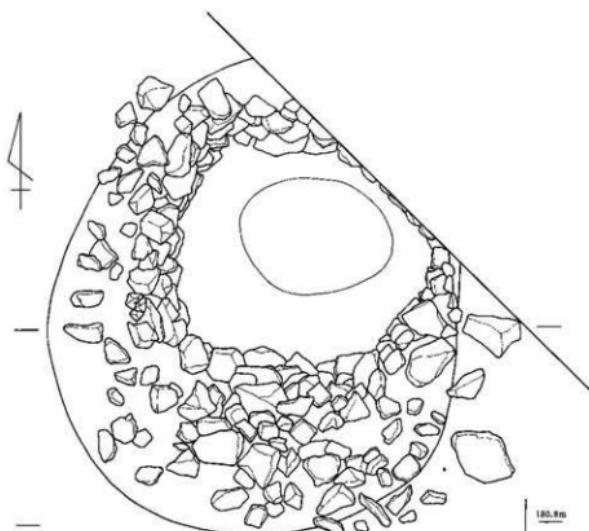
調査区東端で検出された、井戸状遺構である。一部調査区外へ広がっている。掘り方は平面形がやや不整形な梢円形を呈し、短径1.65m、長径2m程度（推定）をはかる。直径1.3mの不整円形の石組みをもつ。検出面からの深さは1.0mをはかり、その上半部には傾斜角50°~70°の石組みを全周に構築している。下半部は素掘りの状態で、底は椀底状を呈している。底には水溜施設は確認されなかった。石組に用いられた石材は、在地産火成岩の亜角礫が主体で、一部に珪化木が混入している。



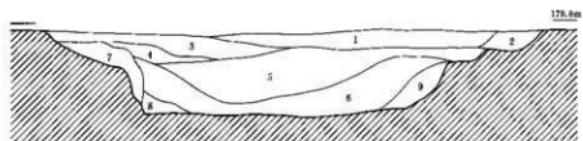
1. 灰褐色シルト  
2. 褐色シルト  
3. 灰色土



第24図 SK04



1. 淡青褐色土



- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. 岩縫褐色シルト     | 6. 明褐色シルト（地山土合） |
| 2. 暗褐色土        | 7. 岩縫褐色シルト      |
| 3. 褐色シルト       | 8. 暗灰褐色シルト      |
| 4. 淡褐色シルト      | 9. 暗黄褐色シルト      |
| 5. 褐色シルト（地山土合） |                 |

0 1m

第25図 SK05、SD01

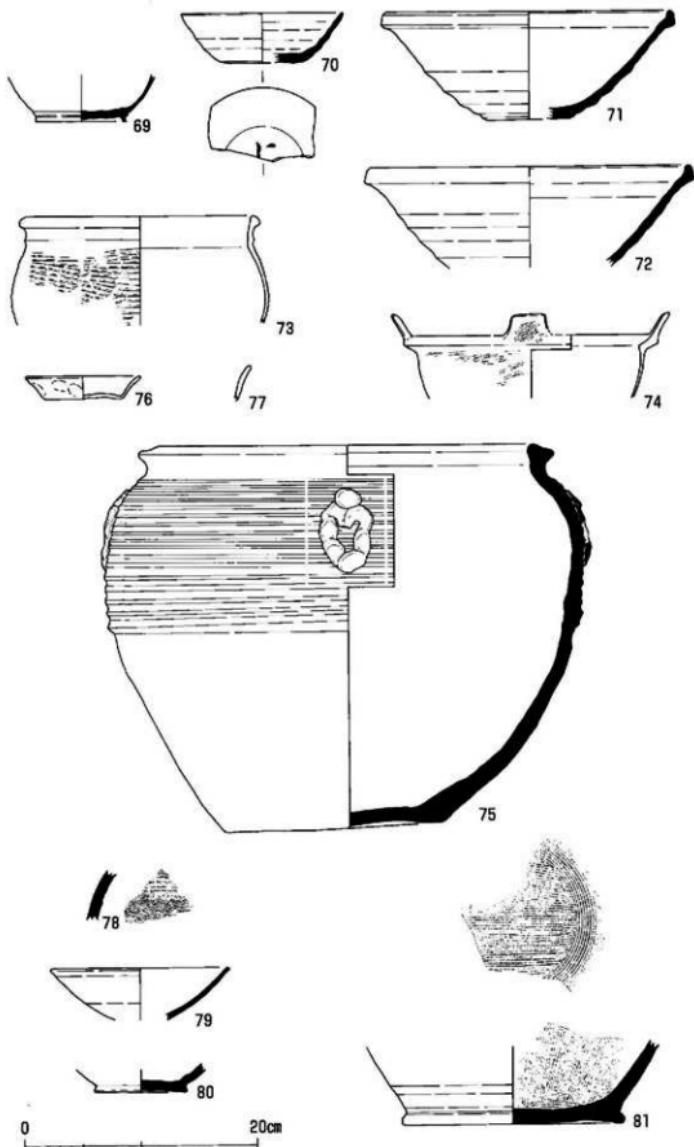
## 第4節 遺 物

### 1. 上 器

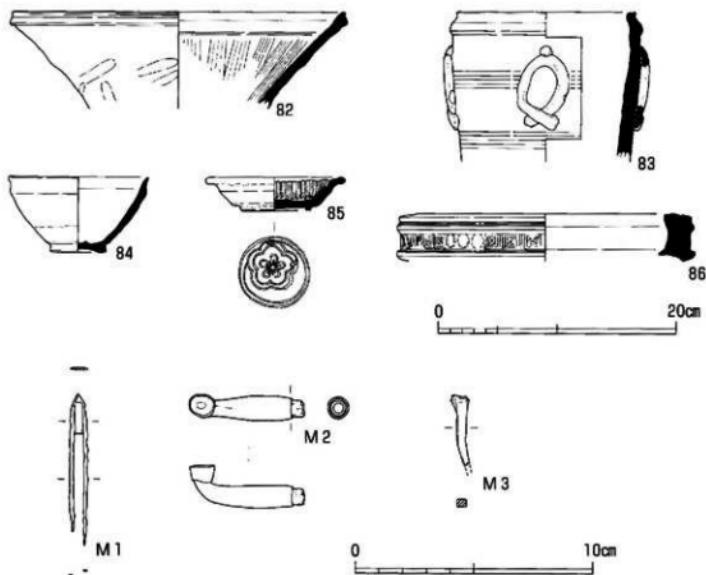
清水廻り遺跡から出土した遺物はコンテナ〔セキスイ TS28〕4箱を数える。出土遺物を概観すると土器類では須恵器および、上飾器が多く、近世の遺構からは陶器が多数出土している。遺構から出土したもののは少なく、大半は遺物包含層からのものである。破片が多く、実測したものは、須恵器7点、土師器4点、陶器6点、瓦質土器1点である。また、石器・石製品については11点、金属器は3点実測を行った。その他SK04壇上内から銅鏡片が2点、皇宋通寶、寛永通寶、熙寧元宝、寛永通寶（銅錢、鉄錢）が各1点整地土内等より出土している。ただしいずれも遺存状態が悪いため、写真撮影のみにとどめた。

(69)は、SD01より出土した須恵器坏である。口縁部が欠損しているため、口径および、器高は不明であるが、高台の断面形は台形を呈する。きめの細かい胎土と堅微な焼成は、清水廻り遺跡から数十mはなれた小名田跡で焼成された上器類のうち、精製品と分類されたものである。(70)～(73)はSK01から出土したものである。(70)は須恵器坏であり、直線的に立ち上がる体部と丸みをもつ底部からなり、底部外側には「上」と考えられる文字が墨書きされている。(71)、(72)は須恵器鉢である。口径はそれぞれ24.7cm、27.4cmをはかるが、口縁端部を上方につまみあげ、直線的な体部をもつなど形状は類似している。(73)は土師器壺である。復元口径は19.6cm、復元腹径は22.2cmをはかる。体部外面にはタタキ痕が残り、内外面ともに煤が付着している。(74)、(75)は近世の遺構から出土したものである。(74)はSK07から出土した上師器鉢である。鉄鍋を模倣したもので、口縁部は外側にひらき、端部を上方につまみあげ、吊耳がつく。復元口径は20.9cmをはかる。内外面とも煤が付着している。(75)はSK05から出土した陶器の壺である。復元口径31.9cm、復元腹径41.2cm、底径19.2cm、器高33.9cmをそれぞれはかる。体部中程に1条の突窓をもち、その上方には16条の凹線が巡っている。また凹線の上には指頭痕を文様にみせた2つの円形状の貼り付け把手が対向する位置に施されている。(77)はP1から出土した土師器小皿である。残存している部分は口縁のわずかの部分であり、計測値等は不明である。

(78)～(86)は遺物包含層から出土した十器である。(78)は須恵器壺であり、残存しているのは体部の一部であるが、その外面には6条一単位の波状紋と凹線が認められる。(79)は須恵器碗である。口縁部の1/12が残存しているにすぎないが、復元口径は14.9cmをはかり、内縁氣味に立ち上がる体部と外側にひらく口縁端部をもつものである。(80)は須恵器碗である。底径7.9cmをはかる平高台の碗であるが、欠損部分が多く口径や器高は不明である。(81)は底部に高台をもち、体部は直線的に立ち上がる擂鉢である。体部内面には縱方向の、底部内面には横方向のそれぞれ梯状工具による6条一単位の横目が施された後、7条一単位の横目が体部と底部の境に輪状に描かれている。時期は17世紀代と考えられる。(82)は丹波燒擂鉢である。復元口径は28.0cmをはかり、体部内面には5条一単位の横目をもつ。口縁は上下に拡張させ、その断面形は三角形を呈している。時期は17世紀代と考えられる。(83)は陶器の壺である。復元口径は15.0cmをはかり、外面には5条一単位の横目が2本認められる。また、把手を意図したと思われる円形の貼り付け飾りが体部にみられる。(84)は内面および、外面上部半が施釉された陶器碗である。復元口径は11.8cm、復元底径4.7cm、器高6.25cmをはかるものである。(85)は陶器皿であり、復元口径は11.0cm、底径5.2cm、器高2.85cmをはかる。体部内面は約5mm幅の縱方向のT工具によって文様風に施され、見込み部には花の模様が描かれている。



第26図 満水廻り遺跡出土土器



第27図 清水廻り遺跡出土土器・金属器

また、底部から体部に立ち上がる所に軸が溜まっている。(86)は瓦質火鉢である。方形文様4つと円形浮文3つが一単位の模様で飾られている。

なお、実測は行っていないが、26枚が重なり合った状態で叢着した須恵器柄(87)がSK04から出土している。これは、小名田窯跡の灰原からも多数出土しており、小名田窯で焼成に失敗したもののが流れ込んだものと考えられ、(69)の須恵器柄と同様、清水廻り遺跡が小名田窯跡の工房跡と考える資料となるものである。

## 2. 金属器

清水廻り遺跡からは簪1点、煙管雁頭1点、鉄釘1点、銅錢5点、鉄錢1点が出土している。簪はSK01、煙管雁頭は遺物包含層、鉄釘は済状遺構から出土している。

簪(M1)は、2本足をもち、頭部は尖頭状を呈する。全体に金銀線の痕跡がみられる。

煙管雁頭(M2)は全長4.85cm、火皿径1.1cmをはかる。小泉分類(小泉弘『江戸を掘る』1983)によれば、火皿が小型化し、逆台形を呈し、脂返しの湾曲がほとんどなくなり、火皿の下に直角に取りつくIV類にあたり、19世紀を製作年代とする。なお、ラワが一部残存している。

鉄釘(M3)は断面が方形を呈し、頭部、先端部とも欠損しているが、現存長2.9cmをはかる。

銅錢は、破片を含めて5点、鉄錢が1点出土している。遺存状態が悪いため、すべて写真撮影のみに止めた。造出上のものとしてはSK04からは(M10・11)の2点が出土している。細部のため錢貨名等は判読できない。残る4枚は遺物包含層からの出土である。銅錢のうち、錢貨名が判読できたものは皇宋通寶、熙寧元寶、寛永通寶の3点で、鉄錢は寛永通寶であろう。このうち寛永通寶2枚は密着した状態で出土している。

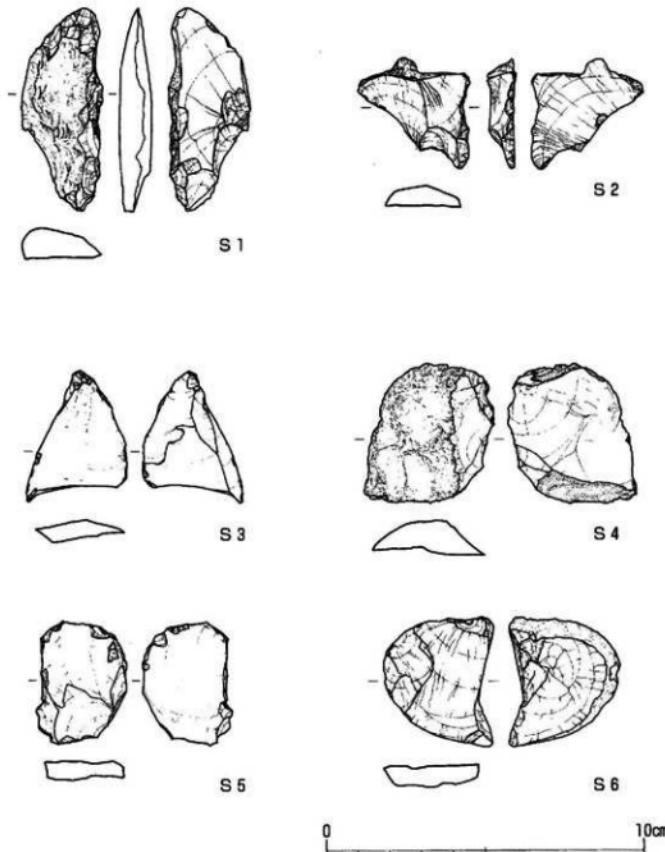
## 2. 石器・石製品

八多中遺跡・清水廻り遺跡からは少量ながら石器・石製品が出土している。

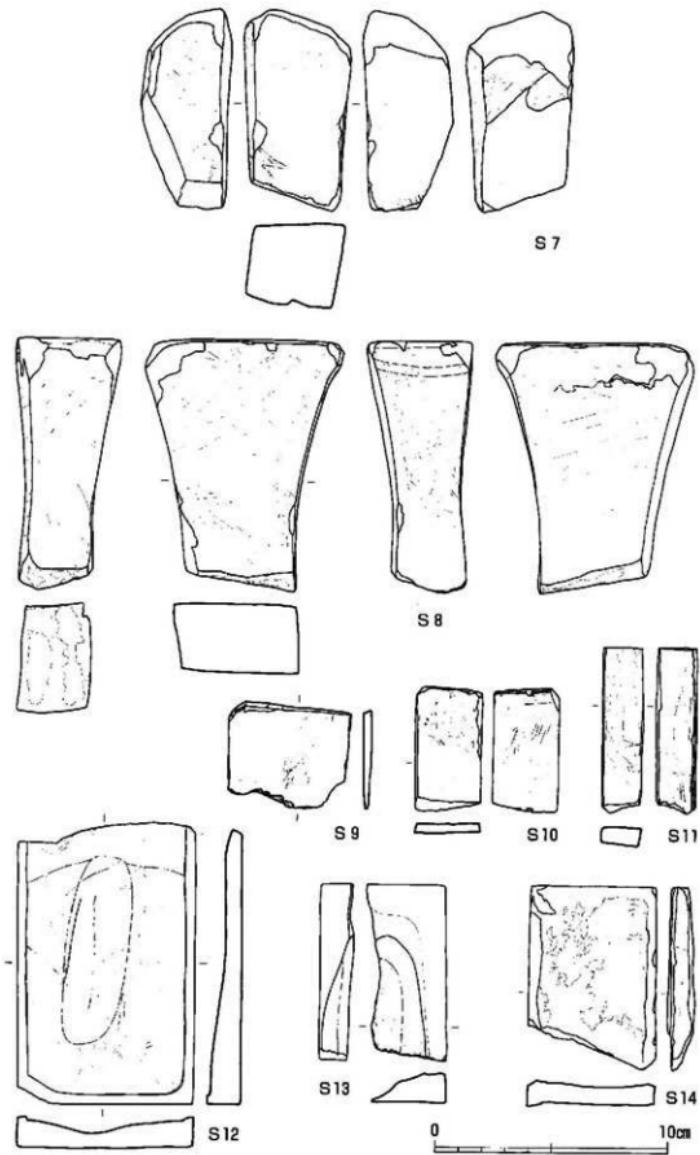
八多中遺跡からは S 1、2、7 が出土している。弥生時代～中世に属するものと思われる。いずれも原位置を遊離した資料であり、量的にもわずかであることから、全体としての評価は下し難い。

S 1 は、サヌカイトの横長剥片を素材とした、スクレーパーである。剥片の末端全体にわたって、表裏から二次加工を施して刃部としている。素材剥片の背面側は自然面に被われており、その特徴から、亜円錐を用いたものと判断される。打面部は、約半分が新しく欠損しているが、遺存する部位は自然面である。

S 2 は、中世の遺物包含層より出土した、サヌカイト製スクレーパーである。横長剥片末端の一部に、



第28図 八多中遺跡・清水廻り遺跡出土石器



第29図 八多中遺跡・清水廻り遺跡出土石製品

腹面側より二次加工を施して、やや内彎する刃部を作り出している。刃部の角度は60°前後をはかる。

S 7は、細粒の砂岩を用いた、直方体状の砥石である。図上の上下両端を欠いており、これを除いた4面に、磨痕が認められる。

清水廻り遺跡から出土したものは、弥生時代以前とした資料（S 3～S 6）と、中世～近世の資料（S 8～S 14）の2者に大別できる。前者の資料は、いずれも原位置を離れており、併行する時期の土器類も見いだされていないことと、弱いながらも軽磨を受けた資料が見られることから背後の丘陵上からの流入と考えられる。さらに、本地域では弥生時代には用いられる頻度が極めて低いチャートが使用されていることから、縄文時代以前の可能性も高いことを指摘しておく。後者の資料は、砥石・硯を主体としており、大半の遺構が所属する中世または近世に併行するものであろう。

#### 弥生時代以前の遺物

S 3は青みがかった灰色のチャートを用いた、使用痕のある剥片である。石材のチャートは良質で、夾雜物は見られない。剥片は、やや幅広の縱長を呈する。剥離の際、打点を中心とした縦割れを生じており、わずかに点状の打点をとどめている。また、剥片の下半も折損している。剥片の両側縁には、微細な剥離痕が不規則に連続しており、使用痕と判断された。SK03より出土。

S 4はチャートの亜円ないし亜角礫から剥離された剥片である。自然面を打面とし、背面側は大部分が自然面に被われる。背面側の1面の剥離痕と腹面とでは打面が90°移動している。SK03より出土。

S 5はチャートの横長剥片である。背面側には、大別4面の剥離痕が認められるが、うち3面は、腹面側の剥離と対向する方向からの剥離である。

S 6はサスカイトの円礫から剥離された剥片である。礫を輪切りにするような剥離が行われたため、剥片の外縁には礫の表皮が付着している。打点を中心とした縦割れを生じている。腹面側はリング・フィッシャーが複雑な走向をみせており、一見、熱破碎のような状況を呈する。遺物包含層より出土。

#### 中世～近世の遺物

S 8は下半部を欠くが、全長が推定20cmを越える、大型砥石である。石材は不明である。4面に磨痕が観察されるが、特に表裏の磨痕には、砥石の長軸に直交する方向のものが少なからず認められる。

S 9は粘板岩製の偏平な砥石、ないしは硯から剥落した断片である。

S 10は近世整地層より出土した、粘板岩製の偏平な砥石である。表裏に不定方向の磨痕が観察される。

S 11は偏平な直方体状の砥石である。縦横に折損しており、全体の法量は不明である。表裏両面に、主として長軸方向に平行ないし斜行した磨痕が見られる。

S 12は石材不明の硯である。海の部分を欠損する。中央部は強い磨耗により凹んでおり、硯面および表面には、墨痕が認められる。SD01より出土。

S 13は石材不明の硯である。すり面の中央で、縦・横方向ともに欠損しており、当該部位は、厚みが1mm程度にまで減少するという、著しい磨耗を見せている。

S 14は近世整地層中より出土した。わずかに黄色みがかった灰色を呈した粘板岩を用いた硯である。縁の部分と下半部が欠落している。表面の状況から砥石として再利用された可能性がある。

表3 八多中遺跡出土石器・石製品法量表

遺物番号	種別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
S 1	スクレーパー	62.5	25.5	10.0	15.1
S 2	スクレーパー	34.0	35.0	9.5	7.4
S 7	砥石	85.0	41.5	39.0	199.2

表4 清水廻り遺跡出土石器・石製品法量表

遺物番号	種別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
S 3	使用痕のある剥片	51.0	31.0	7.0	7.8
S 4	剥片	43.5	40.0	11.5	22.5
S 5	剥片	38.0	28.5	6.0	7.9
S 6	剥片	40.5	35.0	7.5	15.8
S 8	砥石	106.5	85.0	45.5	553.9
S 9	砥石	52.5	45.0	5.0	14.3
S 10	砥石	52.5	28.5	53.0	12.8
S 11	砥石	70.0	17.5	8.5	21.9
S 12	硯	120.0	77.0	15.0	228.0
S 13	硯	75.0	35.0	14.5	51.3
S 14	硯	77.5	50.0	11.5	72.9

## 第5節 小 結

今回の調査では、中世・近世2時期の遺構面を調査できた。

中世遺構群の所属時期は、出土遺物から判断して、12世紀末～13世紀に相当するものである。上坑から出土した融着資料は、隣接する小名田窯跡と本遺跡との関連を示唆するものとして重要である。また、小名田窯跡出土の須恵器椀類と本遺跡出土の遺物には、型式学上の懸隔は認められない。窯跡に隣接した建物群の存在は、神戸市西区に所在する神出窯跡群でも知られているが、ともに、中世窯業集落の一端をしめすものと言えよう。神出窯跡群では、窯跡に隣接する段丘上でクロロピットを伴う掘立柱建物跡が検出されており、建物跡周辺からは、窯跡で生産された椀・片口鉢等が多数積み上げられた状態で出土している。兵庫県における中世窯業の研究は、窯跡の調査例は多いものの、このような窯業集落の調査例に乏しく、その実態はほとんど明らかにされていない。今後、類例の増加を期待したい。

近世の遺構については、調査以北西部約200m<sup>2</sup>の範囲で検出されたにすぎない。土坑・溝以外に顯著な遺構も見られず、総体としての評価は困難である。SK02は、これに隣接して溝が設けられていることから、貯水機能が推定できるかもしれない。さらに堀の容量からは、屋内用の印象を受ける。こうした想像を逞しくするならば、これらの遺構群は、屋内の土間のような場所を示しているとも思える。SK01のような焼土坑の存在は、これと必ずしも矛盾はしないだろう。近世の民家の調査は、町家、武家屋敷等について実施例が多いが、地方の集落については、現存する民家の調査以外には、調査例が僅少なのが現状である。今後の調査を待って、再検討を加えたい。

なお、今回の調査中、中世の遺物包含層に逆離した状態で、チャート・サヌカイト・鉄石英製の剥片等が出土した。このため、中世遺構面の調査終了後、調査区中央部で下層確認トレンチを設定して調査をおこなったが、遺構・遺物は検出できなかった。今後、周辺の調査にあたっては、注意を払うべきであろう。

なお、今回の調査は、1993年の5月から7月にかけて実施したが、当該時期は観測史上まれにみる降雨と低温に見舞われた時期にあたっていた。丘陵地という湧水の多い立地条件と相まって、調査は困難をきわめた。連日の降雨・湧水と排水の繰り返しのため、遺構面の条件は劣悪で、遺構の固化さえまならなかつた。限られた調査期間内では、こうした条件を克服することができず、一部の掘立柱建物跡などは、柱の位置や数まで確認できないままになってしまった。これは調査担当者としては、極めて遺憾なことであったが、本文中における遺構の記載の不備は、こうした状況下で発生したものであることを、敢えて記して、今後の課題としておく。

(付録)

## 小名田窯跡・八多中遺跡・清水廻り遺跡 出土須恵器の蛍光X線分析

三辻 利一 (奈良教育大学)

須恵器の产地推定の基本的な考え方は遺跡出土須恵器を窯跡出土須恵器に対応させることである。対応した窯跡が生産地と推定される訳である。

通常、1トンの岩石を分析すると、全元素が検出されるといわれる。各地の粘土を分析すると、粘土の理論化学式 ( $\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ ) で表示されるように、Al、Siのみが含有される訳ではない。岩石と同様、種々の元素が含有されていることは蛍光X線分析と放射転移分析によって示されている。このことは母岩中の残渣鉱物が微粒子となって粘土中に包含されていることを示す。そして、粘土の地域差、したがって、須恵器にみられる地域差はこれらの残渣鉱物に由来する元素によるのである。筆者は火成岩を構成する主成分鉱物中の主成分である長石類(とくに、カリ長石と斜長石)中に含有されているK、Ca(これらは長石類の主成分元素である)とRb、Sr(これらは微量元素であるが、主成分元素との正の相關性から、RbはKと、また、SrはCaと共存していたと推察されている)を選択し、これらが有効に地域差を示すことを全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから実証した。この結果にもとづいて、筆者はK、Ca、Rb、Srの4因子を使って产地推定を行っている。

产地推定の手続きは、まず、K-Ca分布図、Rb-Sr分布図を作成し、両図面上で遺跡出土須恵器を窯跡出土須恵器に対応させるのである。これで定性的にではあるが、产地を推定することはできる。これを定量的にしようすると、統計学的手法の導入が必要である。

本報告では作図法を使って、八多中遺跡、清水廻り遺跡出土須恵器の产地を推定した結果について報告する。

表1には分析値をまとめてある。分析値はすべて、同時に測定した岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線を使って標準化した値で示してある。JG-1による標準化値は普遍化された蛍光X線強度であり、使用する装置の機種が変わっても変動しない。また、JG-1による標準化値と含有量の間には直線性があることが日本地質調査所から配付されている岩石標準試料を使って示されているので、JG-1による標準化値から%濃度やppm濃度への変換は容易であるが、データ解析にはJG-1による標準化値を使用する方が便利である。したがって、本報告でもJG-1による標準化値を使って両分布図を作成した。

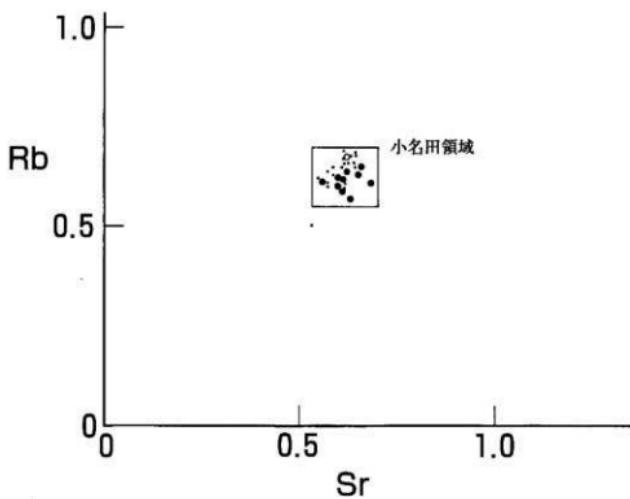
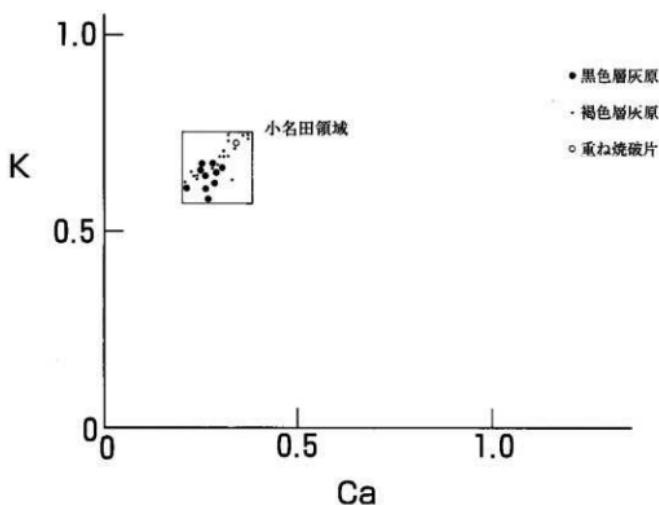
まず、図1には小名田窯跡から出土した須恵器のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を示してある。黒色層灰原から出土した須恵器と褐色層灰原から出土した須恵器の胎土にはとくに差異は認められない。両者はまとまって集中して分布していることがわかる。これらのほとんどを包含するようにして小名田領域を描いてある。この領域はほとんどの点を包含するようにして任意に描いたものであるから、定量的な領界を示しているわけではない。それでも他の窯跡出土須恵器の領域と比較する上には十分役に立つ。そして、遺跡出土須恵器が両分布図で小名田領域に分布すれば、小名田窯の可能性は十分あることになり、逆にはすれば、小名田窯の可能性はほとんどなくなる。なお、重ね焼き破片は両分布図で小名田領域によく対応しており、小名田窯の製品と推定される。

図2には清水廻り遺跡と八多中遺跡から出土した須恵器の両分布図を示してある。清水廻り遺跡出土の4点の須恵器はいずれも、両分布図で小名田領域に分布しており、これらは4点とも小名田窯の須

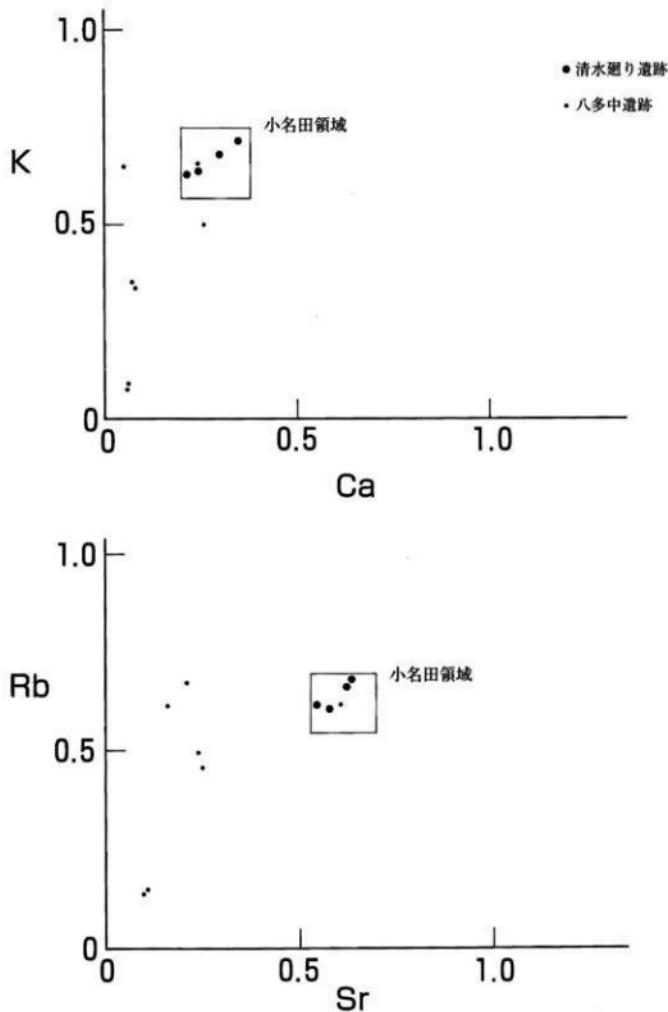
恵器である可能性が高い。表1より、Fe、Na因子でもよく対応していることがわかる。これに対して八多中遺跡出土須恵器のはほとんどは小名田領域にはほとんど対応しない。サンプル1の1点のみが両において小名田領域に対応し、小名田窯産の須恵器と推定される。他の6点の須恵器は小名田領域を大きく超えており、小名田窯産の可能性はほとんどない。この6点の須恵器のうち、サンプル1の2点とサンプル2の2点はそれぞれよくまとまって分布しており、同一産地の製品と推定されるが、サンプル1とサンプル2では胎土は異なる。残るサンプル1の1点とサンプル2の1点はRb-Sr分布図ではまとまって分布しているものの、K-Ca分布図では少しづれて分布しており、かつ、Na因子でも大きくなれる。したがって、別産地の須恵器とみられる。八多中遺跡出土須恵器の胎土は小名田窯跡の須恵器と同じ胎土のもの他に、少なくとも、4種類の胎土の須恵器が混ざっていたことになる。これららの須恵器の産地は不明である。

表1 分析データ

遺跡名	サンプルNo	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	
八多中遺跡	9-5196	1	0.500	0.259	1.94	0.616	0.607	0.245	
	9-5197	タ	0.089	0.063	1.85	0.153	0.109	0.021	
	9-5198	タ	0.083	0.062	1.85	0.143	0.102	0.021	
	9-5199	タ	0.649	0.050	2.63	0.684	0.210	0.100	
	9-5200	2	0.663	0.236	1.82	0.618	0.162	0.353	
	9-5201	タ	0.314	0.076	2.27	0.495	0.242	0.070	
	9-5202	タ	0.351	0.068	1.60	0.462	0.249	0.102	
清水通り遺跡	9-5203	3	0.684	0.304	1.93	0.666	0.624	0.380	
	9-5204	タ	0.626	0.213	1.88	0.610	0.584	0.319	
	9-5205	タ	0.642	0.243	2.03	0.622	0.545	0.329	
	9-5206	4	0.717	0.349	1.78	0.691	0.643	0.386	
小名田窯跡	9-5207	5	灰原(黒色層)	0.662	0.305	1.89	0.650	0.655	0.335
	9-5208	タ	タ	0.577	0.268	2.18	0.568	0.626	0.288
	9-5209	タ	タ	0.655	0.246	2.23	0.606	0.564	0.340
	9-5210	タ	タ	0.607	0.264	2.23	0.592	0.613	0.317
	9-5211	タ	タ	0.647	0.290	2.08	0.616	0.612	0.316
	9-5212	タ	タ	0.623	0.284	2.21	0.597	0.598	0.351
	9-5213	タ	タ	0.656	0.254	1.75	0.635	0.615	0.356
	9-5214	タ	タ	0.637	0.257	1.95	0.612	0.683	0.346
	9-5215	タ	タ	0.669	0.281	2.03	0.626	0.650	0.373
	9-5216	タ	タ	0.614	0.211	1.90	0.621	0.599	0.278
	9-5217	6	灰原(褐色層)	0.739	0.356	1.88	0.690	0.613	0.409
	9-5218	タ	タ	0.630	0.227	2.22	0.600	0.568	0.320
	9-5219	タ	タ	0.637	0.228	2.18	0.621	0.548	0.313
	9-5220	タ	タ	0.726	0.321	1.87	0.663	0.614	0.400
	9-5221	タ	タ	0.745	0.373	1.84	0.682	0.642	0.406
	9-5222	タ	タ	0.735	0.366	1.90	0.679	0.630	0.387
	9-5223	タ	タ	0.659	0.281	1.96	0.654	0.584	0.343
	9-5224	タ	タ	0.642	0.234	1.97	0.640	0.571	0.342
	9-5225	タ	タ	0.688	0.297	2.10	0.650	0.605	0.376
	9-5226	タ	タ	0.688	0.319	1.93	0.651	0.636	0.375
	9-5227	7	灰原出土	0.636	0.241	2.27	0.504	0.528	0.267
	9-5228	タ	タ	0.687	0.307	2.01	0.660	0.622	0.378
	9-5229	タ	タ	0.745	0.319	1.85	0.656	0.635	0.348
	9-5230	タ	タ	0.652	0.226	2.09	0.610	0.566	0.344
	9-5231	タ	タ	0.665	0.288	2.24	0.634	0.585	0.329
	9-5232	タ	タ	0.707	0.338	1.98	0.683	0.641	0.396
	9-5233	タ	タ	0.700	0.311	2.02	0.673	0.610	0.388
	9-5234	タ	タ	0.607	0.224	2.04	0.611	0.606	0.285
	9-5235	8	重焼き破片	0.713	0.336	1.95	0.672	0.608	0.381



第1図 小名田痕跡出土須恵器の両分布図



第2図 清水廻り遺跡・八多中遺跡出土須恵器の両分布図

## 報告書抄録

ふりがな	はたなか いせき・しみずまわり いせき
書名	八多中遺跡・清水通り遺跡
調書名	山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XXVI
卷次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	173冊
編著者名	久保弘幸・長濱誠司・仁尾一人・岡本一秀・三辻利一
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月31日

所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
八多中	兵庫県神戸市 北区八多町中	28109	890111			19900226	264m <sup>2</sup>	山陽自動車道(神戸~三木)建設に伴う
						19900309		
			930089	34°50'49"	135°13'02"	19930730	3288m <sup>2</sup>	
						19940107		
			930244			19940322	27m <sup>2</sup>	
			940102	34°50'47"	135°13'10"	19940418	320m <sup>2</sup>	
						19940425		
			940223	34°50'48"	135°13'13"	19940704	256m <sup>2</sup>	
						19940712		
			940105	34°50'48"	135°13'07"	19940801	1321m <sup>2</sup>	
清水通り	兵庫県神戸市 北区八多町下 小名田		940311	34°50'48"	135°13'11"	19941001	2315m <sup>2</sup>	
			950361			19950111		
						19950331		
						19951113	20m <sup>2</sup>	
			890110			19900313	64m <sup>2</sup>	
			930031	34°50'47"	135°12'56"	19930730	1076m <sup>2</sup>	
						19940107		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八多中	集落跡	古墳後期	堅穴住居跡1棟	須恵器	
		飛鳥時代	溝	須恵器・土師器	墨書き土器の出土
		奈良時代			
清水通り	集落跡	中世	掘立柱建物跡	須恵器・土師器	土師器小皿を埋納した
			溝・土坑	磁器・木器	土坑を検出
		近世	掘立柱建物跡・土坑	須恵器・土師器 銅錢	小名田窓跡に関連する 遺構を検出
			土坑	陶器・磁器・金属器	近世民家に伴う遺構・ 遺物を検出

# 写真図版

# 写真図版1 遺跡遠景



遺跡の遠景（南から）



遺跡の遠景（北東から）



遺跡の遠景（東から）



遺跡の遠景（北西から）



八多中遺跡全景（南から）



八多中遺跡全景（北東から）



丘陵上からの遠景（北から）



県道南側確認トレンチ（南から）

写真図版3 八多中遺跡2



A地区航空写真（南から）



B・C・D地区航空写真（垂直写真）



H地区航空写真（垂直写真）



I地区航空写真（北西から）



H地区全景（北東から）

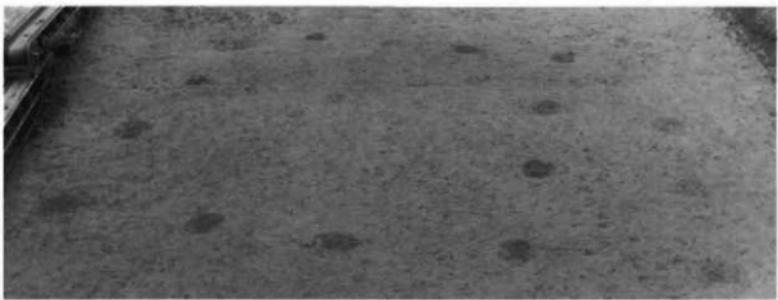


I地区全景（北西から）

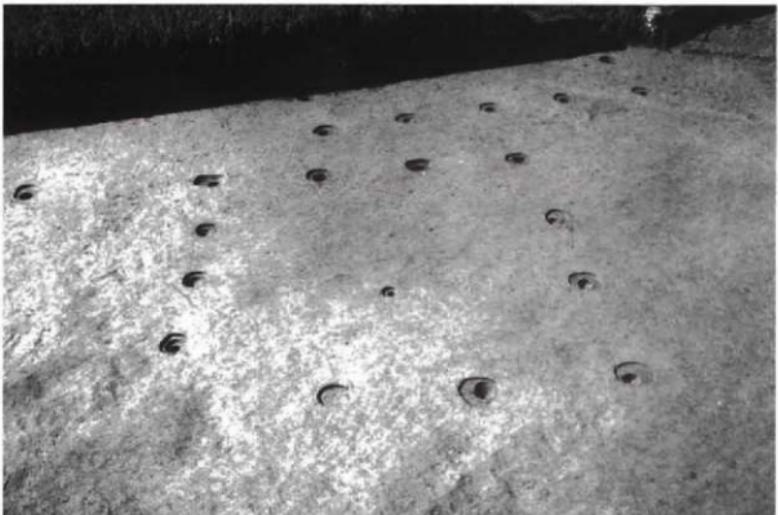
写真図版5 八多中遺跡4



H地区 SH01(北から)



H地区 SB01・02検出状況（北西から）



H地区 SB01・02（北東から）



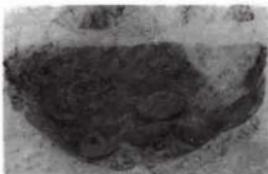
A地区 SK01 (南から)



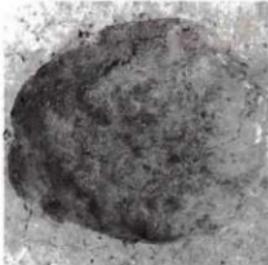
SK01断面 (東から)



1地区 SK02土器出土状況 (西から)



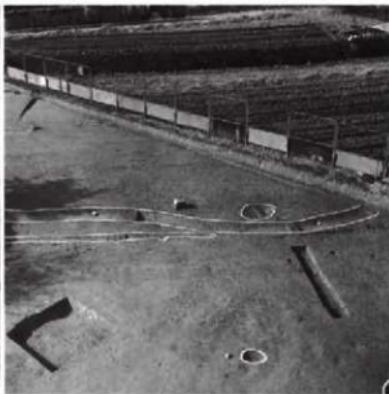
SK02断面 (東から)



SK02完掘状況 (西から)



SD01 A地区検出部分 (西から)

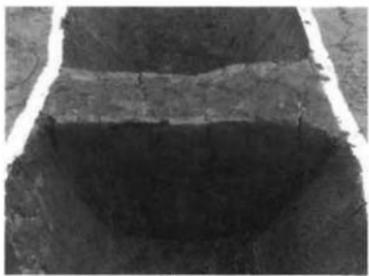


SD01 B地区検出部分 (東から)

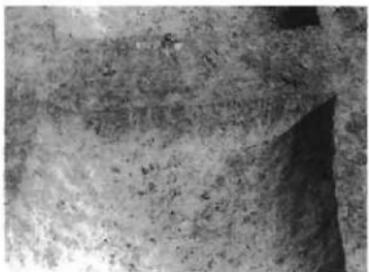
写真図版7 八多中遺跡6



SD01 I地区検出部分（北東から）



SD01 AA'断面（南西から）



SD01 CC'断面（西から）



SD01土器出土状況



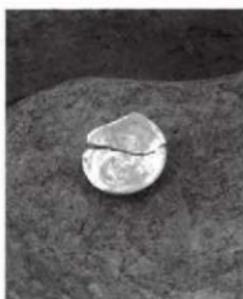
A地区 SD02（西から）



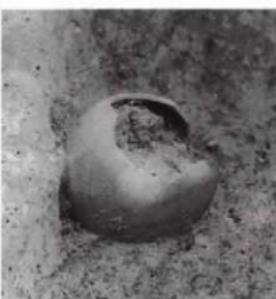
SD01と02（西から）



SD02断面（西から）



SD02土器出土状況



SD02流木出土状況

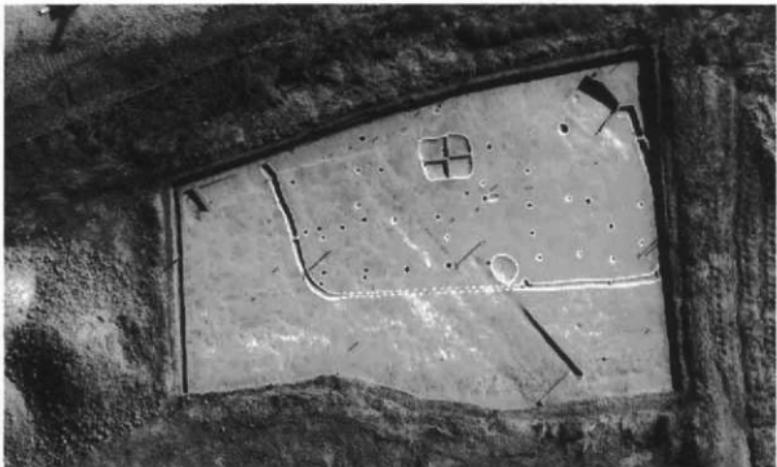


SD06 C地区検出部分（南から）



SD06 D地区検出部分（南から）

写真図版9 八多中遺跡8



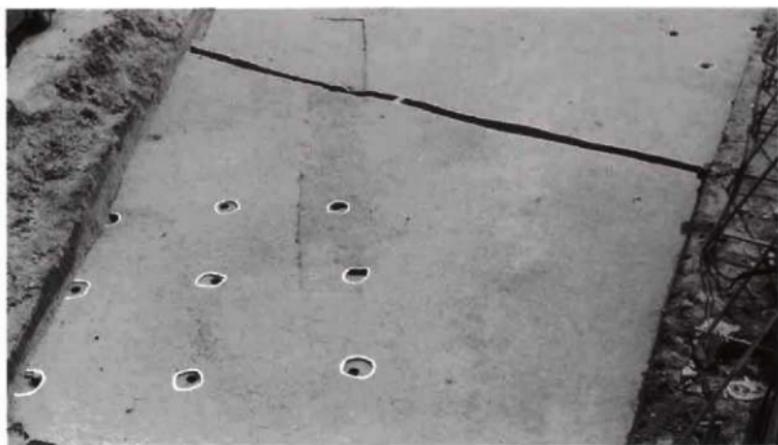
E地区全景（垂直写真）



J地区①全景（垂直写真）



J地区②全景（垂直写真）



G地区 SB03・04（北西から）



SB03 G地区検出部分（南東から）



SB03 J地区検出部分（南東から）

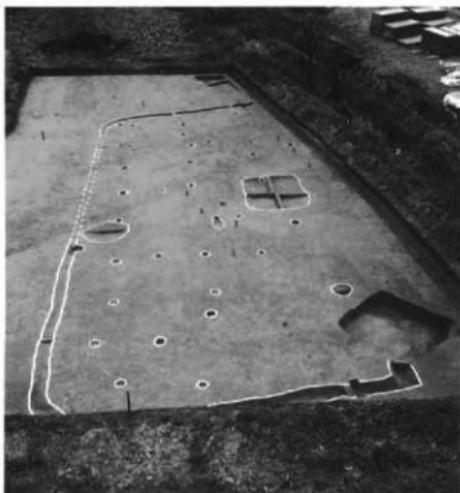


SB04（南東から）

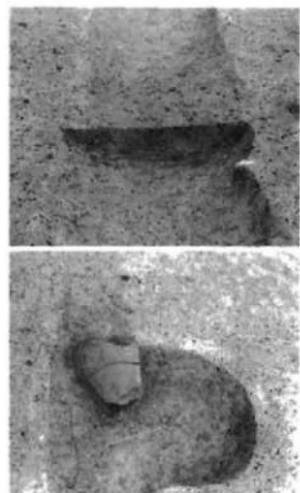


SB04柱痕・板

写真図版11 八多中遺跡10



E地区全景（北西から）



SD11断面・土器出土状況



F地区全景（南から）



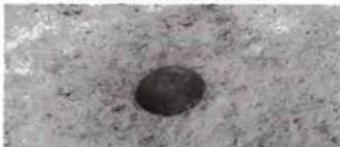
J地区②全景（北東から）



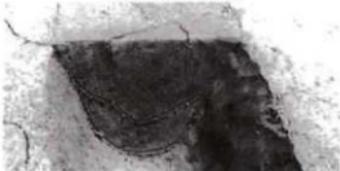
SD07 J地区検出部分（南西から）



SD07 AA'断面（北西から）



SD07土器出土状況



J地区 SD09断面（南から）



F地区 SD08断面（南西から）



SD07 F地区検出部分（東から）



F地区 SD10断面（南から）



J地区① 全景（南西から）

写真図版13 清水廻り遺跡 1



清水廻り遺跡 全景（南西から）



SK04集石（南東から）



SK04土器出土状況



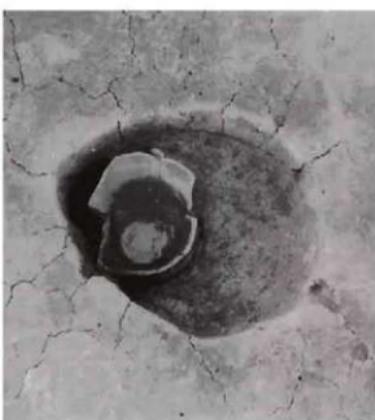
SK05（南東から）



SD01断面（南東から）



近世遺構全景（南東から）



写真図版15 八多中遺跡



1



2



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15

SB03・04、SK02出土土器



16



17



18



19



20



21

SD01出土土器



22



23



24



25



29



32



33



35



36



31



37



38

写真図版17 八多中遺跡



28



27



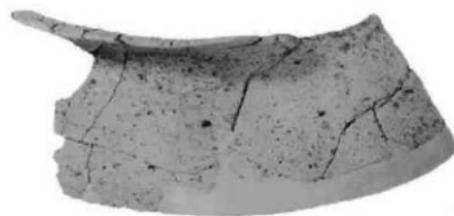
30



26



34



39



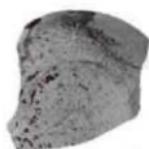
42



40



44



43



41



53



46



68



63



64



3



65



56

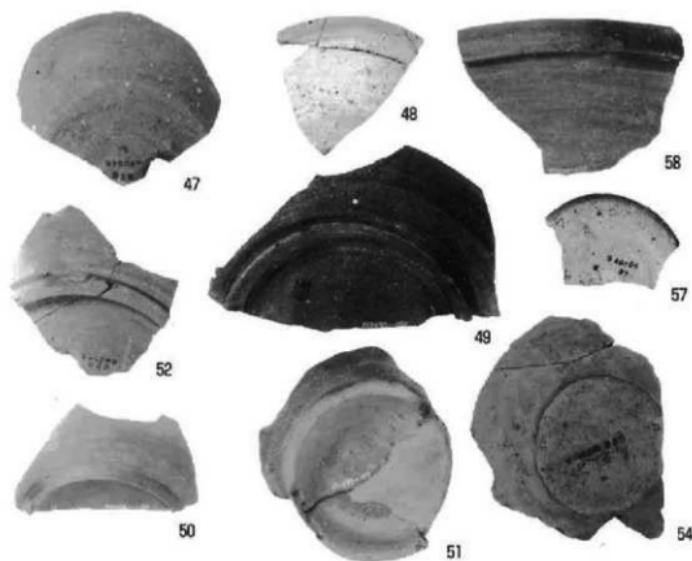


45

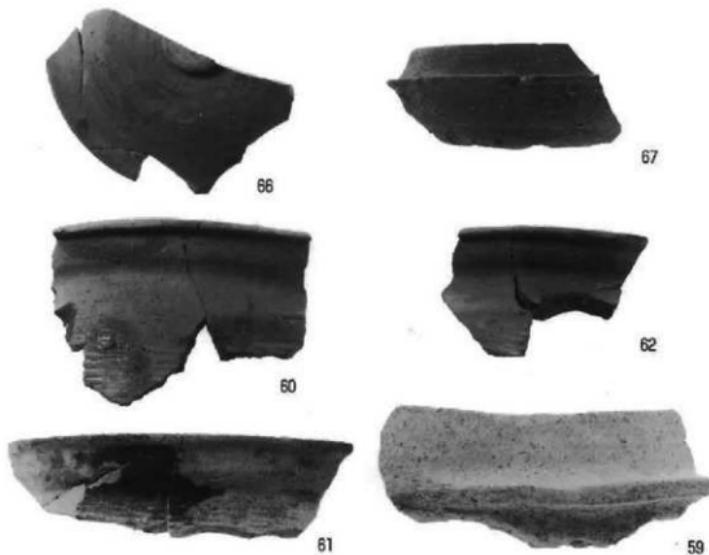


55

写真図版19 八多中遺跡



遺物包含層出土土器(2)



遺物包含層出土上土器(3)



84



85



75



83



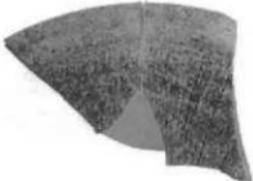
—



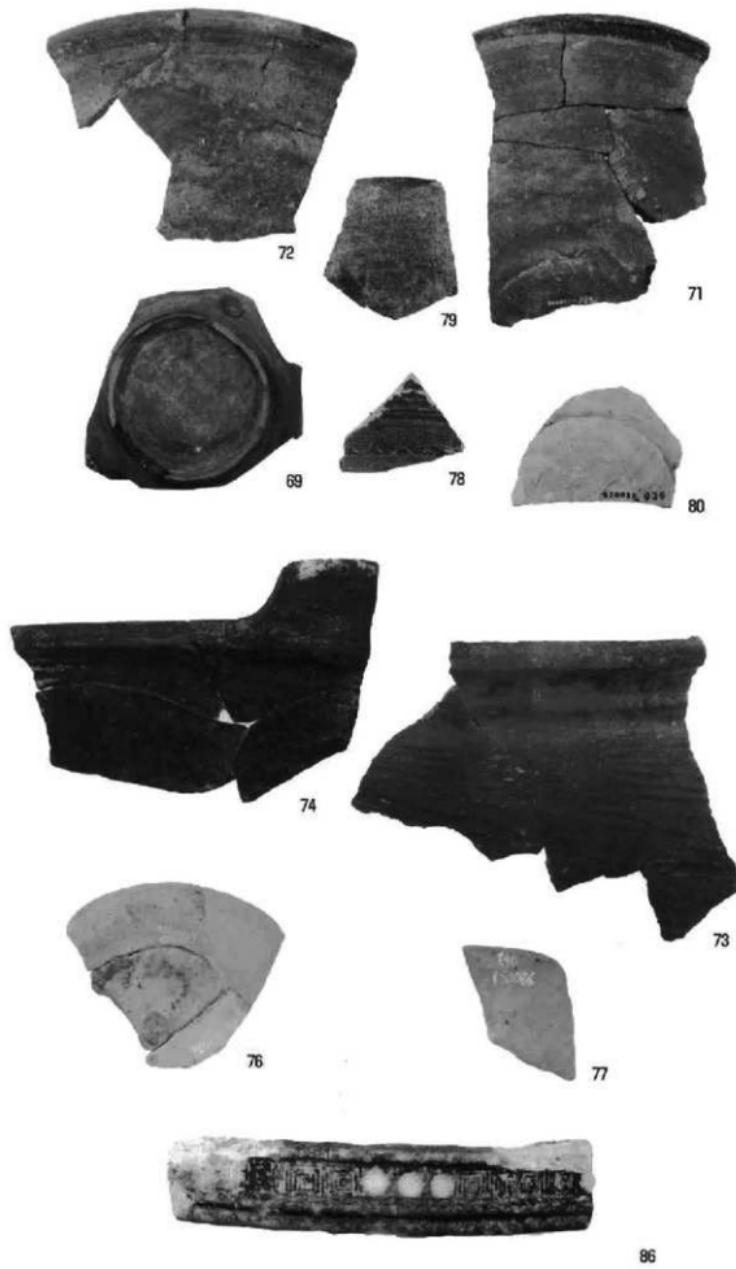
81



—



82



出土土器(2)



70

墨書き器



87

須恵器輪重ね焼



W1

八多中遺跡 SB04柱根



M1

M2

M3

出土金属器



M4



M5



M6



M7



M8



M9



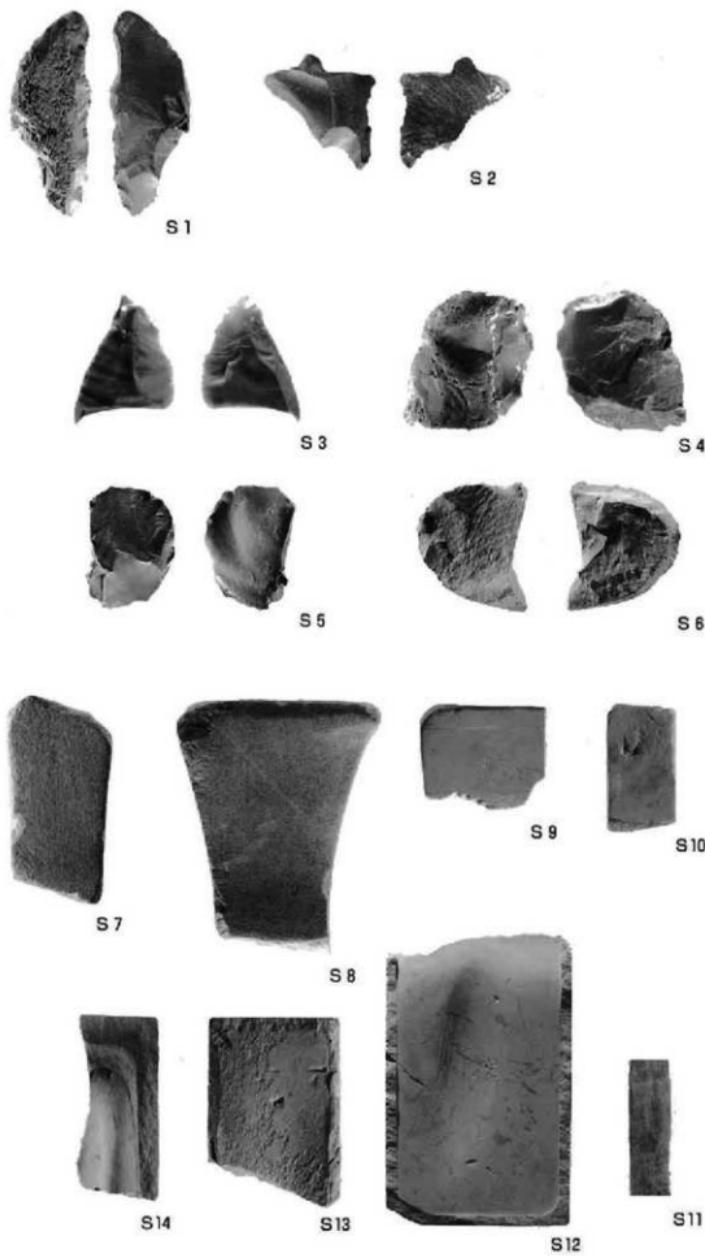
M10



M11

出土銅錢 (M4・5 八多中遺跡出土、M6～11 清水廻り遺跡出土)

写真図版23 清水廻り遺跡



八多中遺跡・清水廻り遺跡 出土石器・石製品  
(S 1・2・7八多中遺跡出土、S 3~6・8~14清水廻り遺跡出土)

---

兵庫県文化財調査報告 第173冊

## 八多中遺跡 発掘調査報告書 清水廻り遺跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXVI —

平成10年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL(078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒652-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号  
TEL(078)341-7711

印刷 船場印刷株式会社  
〒670-0994 姫路市定元町4-2  
TEL(0792)96-3535

---